

みなまたの  
伝説  
■  
民話

制作・水俣市



# 恋路島物語



この物語は、当時九州制覇を目論んでいた肥前の竜造寺隆信が、天正12年(1585)3月、島原の有馬義純を攻めた時、有馬義純の依頼で援軍として出陣した薩摩の島津軍の若き武将にまつわる物語である。

竜造寺隆信から攻められた有馬義純は、朋友関係にあった薩摩の島津義久に助けを求めた。島津義久はこれに呼応して末弟の家久を大将に3千余騎の勇猛な薩摩兵児を島原に送ることにしたが、その中に川上左京忠堅と言う若い武将がいた。

3千余騎の島津軍は、当時薩摩領であった水俣に兵を結集し、袋湾に軍船を揃え出陣した。

若手の武将川上左京は27歳で、新婚の新妻は他の人達と共に出陣兵士の武運を祈って袋湾まで彼を追い別れを惜しんだ。この時、袋の村人達は棒踊りを踊って歓送したと言い、袋の棒踊りはここから始まったと言われている。

左京の妻は、岸を離れ次第に沖に霞んで行く軍船を恥じらいながら人陰から見送っていたが、夫を恋うる心を抑え切れず、遂に小舟を雇って水俣湾に浮かぶ小島(恋路島)に渡り、石室に籠り、海辺に石を積み上げて、夫の武運を神仏に祈り続けた。しかし、この強い恋慕の思いを募らせたまま、夫の帰りを待たずして哀れにも一人淋しく島でこの世を去ったと言う。

一方島原に渡った島津家久の率いる3千余の兵は、沼を前にした丘の上に陣取って戦いに臨んだ。

これに対峙した竜造寺隆信の1万3千の大軍は3月24日を期して島津軍を

一挙に殲滅せんとばかりに押し寄せて来た。家久は策をめぐらし、丘の上に少数の鉄砲隊と弓隊を伏せさせ、本隊はにわかには退却する様に見せかけた。これを見守っていた隆信は、自分が率いる1万3千の大軍に、島津軍が怖れをなして崩れ出したと思ひ込み、一気に押しつぶそうと追って来た。この時、島津軍が一斉に銃を射ちかけ、矢を放ったため竜造寺軍は、ばたばたと倒れ、そこに島津軍の本隊が切り込み騒然となった。

この騒ぎを見た隆信は、味方同志が小競り合いを起こしたと勘違いして「隆信ここにあり、静まれ、静まれ」と大音声で叫んで立ち上った。

その時、敵の総大将竜造寺隆信を求めて敵中深く切り込んでいた川上左京は、この声を聞いて隆信のそばに駆け寄り、「御免」と言うなり隆信の首を打ち落とした。

「隆信討ちたり」の声は敵、味方の全軍に伝わり、遂に竜造寺軍は惨敗し、島津氏の勢いは全九州に及ぶ程になった。

敵の総大将竜造寺隆信の首を討ち取り、最高の武勲を立てた左京は、一時も早く、待っている最愛の妻のもとにこの喜びを伝えようと帰って来たが、待っているはずの妻は左京の帰りを待たず、既にこの世を去っていた。左京は、妻が小島で一人吾が名を呼び続けて逝ったと言う悲報をきき、直ぐにその島に渡り、夫を恋うる一念で築いたという石積みを抱きしめ、今は無き妻を恋い慕いながらその名を呼んで泣いたという。

その石が恋路島の西端にある妻恋岩として名残を留めており、恋の浦の波音が今もなお過ぎし日の美しいロマンを語り続けているようである。

水俣市史「民族・人物編」より

# 鞍懸淵と四郎淵

昔、久木野城(鶴之城や鶴平城ともいった)に、久木野四郎という城主がいたころの話である。

あるとき、鶴之城の城下で戦いが始まった。久木野四郎が名馬にまたがり軍兵を指揮していたとき、不意に敵の矢に見舞われ、無残にも馬もろとも足もとの淵へ転落して絶命、それからはその淵を「四郎淵」と呼んだ。(久木野川の鶴平集落の真下にある)。また同時に転落した馬は流されて四郎淵の次の淵に鞍だけが引っかかったといわれ、この淵を「鞍懸淵」と呼ぶようになったと伝えられている。

四郎の妻は、夫の安否を気にかけて尋ねていったが、夫の死を伝え聞いて悲しみにくれ、哀れ仁王木の山中で自害し主人の後を追ったと伝えられている。

(注)この二つの淵は、昔は青々とした底知れぬ深淵であったが、長年月の時の流れに、洪水などの砂礫で埋まってしまい、いまは昔の面影はなくなってしまったが、四郎淵の南側水田の一角が一段高くなっている田の中ほどに、四郎の墓といわれる墓石が残っていた。現在では農耕の邪魔になるので、四郎淵の直ぐ上方の川土手に移転して物語の証として残っているのみである。

水俣市史「民族・人物編」より

# 雨ざらしの水天宮

昔、寒川の水天さんが雨ざらしのまま鎮座されているのを村人がみて、勿体ない、罰があたるということで、みんなで上屋を建てることにした。

ところが、建てたあと大雨で流されてしまった。また建てた、また流された。大雨が降るたびに流されてしまった。

そしてある晩のこと、水天宮の祭り一切を取りしきって座元を務めている、寒川栄次郎の先祖の夢枕に水天さんが立たれ、「上屋はいらぬ、雨ざらしにしてくれ」とのお告げがあった。さすがは水の神様であると村人は関心し、神意にさからわず、それ以来上屋をつくるのはやめ、露天のままにしておいた。それでも長い期間、たびたびの大洪水にもながされるようなことは只の一度も無かった。

近くは大正十二年のかつてない集中豪雨の折、集落の裏山が山塩で崩壊し、民家二軒が流失した。そのとき、草刈り帰りの乙女二人が草を担いで通りかかり、不運にも二人のうち後続の一人は前の娘より数歩遅れていたばかりに、山崩れの土砂と一緒に流され、亡くなってしまった。その時も水天さんは微動だにせず激流の中に鎮座ましましておられたという。

水俣市史「民族・人物編」より

# 吉井紀井守物語

久木野郷は、肥後と薩摩の国境になっているだけに、乱世の戦国時代には重要な地点としてその役割は重く、特に大川村は薩摩の島津、球磨の相良との境に位置しており、その攻防には十分な備えが要求されたため、多くの優れた武芸者が出ている。一説に、人吉の剣豪丸目蔵人佐が同地に一時足を止め、剣の指南をしたと伝えられているが、資料として残っている古文書には、文化三年(一八〇六)に蔵人佐の流派を汲む者から「新影侍捨流」の指南を受けたという、白坂満則氏の先祖、白坂熊之充家に巻物が現存している。因みに丸目蔵人佐は天文九年(一五四〇)に生まれ、三十歳のとき、大口城の合戦(永禄十二年(一五六九))で敵の計略に乗って完敗、その責めで藩主相良義陽から出仕差し止めの処分を受け、約二十数年を浪々の身で過ごし、その間、人吉城の子弟の出張教授や時には他郷へ待捨流の普及指南にも出かけたとあり、寛永六年(一六二九)に没したとある。

さて、吉井紀井守も大川村の住人で、馬術の名人として名を残した一人である。同地区には馬場という地名が残っているが、紀井守の馬術は肥後国内に並ぶ者が無いといわれたほどの名人芸で、百聞(約一八〇メートル)の馬場に百本の針を落としておいて、疾駆する馬上からすべて拾ったというほど、神技にひとしい技の持ち主で常日ごろから藩主に忠節を尽くすため武術の道に励んでいたという。

ある年の正月、肥後藩内の武芸者が熊本に集まり、藩主細川公の面前で、かねて自慢の腕前を披瀝し、その技を競った。中でも特に吉井紀井守の馬術は一際目立つ見事さで、並みいる人びとに手に汗を握らせ感嘆の息をのませた。藩主は、人間業とは思えぬ余りにも優れた馬術に驚くと同時に「これはまさしくバテレンの妖術使いに違いない。この者を生かしておけば将来如何なる禍いを招くやも計り知れぬ・・・」と紀井守は逮捕され、直ちに処刑を受けることになった。

ちょうどその場に居合わせた、以前薩州から真宗禁制の難を逃れて久木野寺床村の山中に庵を結び、念仏布教に努めた元大野村(現芦北町大野)光勝寺の開祖永龍師が、当時八代郡早尾城の城代をつとめていた時で、藩主の間近かに同座して一部始終を見ていたが、思いもかけぬ成りゆきに驚くと同時に、いたく紀井守を憐れみ、藩主に向かって「一芸の奥技に達したる者は、常人にはみられぬ神業を現すもので、断じてバテレンの魔術にあらず・・・・・・」と、懇々と説得し強くこれを諫めた。藩主もようやく自分の非を悟り、これを許したので、吉井紀井

守はまさに九死に一生を得ることができた。

この話を伝え聞いた寺床村を始め大川村、あるいは近傍の村人たちは、永龍師を命の恩人と崇め、のちに大野の光勝寺の門徒としてその恩義に報いたという。

水俣市史「民族・人物編」より

# 久木野城

久木野城は、久木野鶴平集落にあって、古くは鶴の城とも鶴平城とも呼ばれ、大関山に源を発する桜川と、久木野川の合流点に位置する山陵の頂上部分にあった。

この久木野城に馬術の名人がいた。戦いのとき、敵の弓矢が飛び交うなかを、愛馬の横腹にぴったりへばりついて矢を避け戦場を駆け巡ったという。

神業に近いその腕前に、恐れをなした城主は「このような者を生かしておけば、将来どんなことを仕出かすか分からん」といって部下に命じて殺してしまった。

地獄谷を流れる桜川の川縁にこの名人の苔むした墓石が今も残っている。また、この城跡の東側四〇〇メートルの山の中腹に、昔から湧水があって、村人はそこを「風呂元」と呼んでいる。

長い長い戦国の世に、球磨の相良勢と、薩摩の大口、山野、菱刈などの軍勢の間で激しい攻防戦が繰り返されていたころ、城兵たちが戦いの合間に戦塵の垢をこの風呂元で落としたという。( 相対時する中尾城( 亀の城・・・有木地区) にも流れ矢橋近くの川端に、城兵が湯浴みしたという風呂元の地名が残されている。)

久木野城跡の東側下方に「泣く子山」と呼ばれているところがある。そこから夜な夜な赤子の泣く声が聞こえたと言い伝えもあるが、この城との関係があるのかどうか、そのわけは分からない。

(注)久木野城は、鶴平城の外に岩群城、岩峰城とも呼ばれた。

水俣市史「民族・人物編」より



# 久木野に寺院が無いわけ

いつのころか定かではないが、久木野郷には古里有木の南側山麓に一寺があったと語りつがれている。(越小場日当野から有木に通ずる市道のすぐ左下に、今も高寺という小字名が残っている。)

この寺が現存したころ、久木野郷には西に久木野城、東に中尾城が相對峙して、常に反目の刃を研ぎ、隙あらばわが手中に……と虎視眈眈、互いにその機をうかがっていた。

策士であった久木野城主は、この高寺がちょうど中尾城の南側約五〇〇メートルの地点にあることに目をつけ、ひそかに甘言をもって院主と氣脈を通じ、ある日、中尾城主以下一族郎党を寺に招待し、およそ山寺には似つかぬ山海の珍味をもって歓待させた。一同は時を忘れて馳走を受け、酒に酔いしれ、なお酒宴は続けられた。

久木野城ではこの機をのがさず、ひそかに城兵を中尾城に忍びこませ、刀の目釘を抜き、弓の弦を切るやら、武器の使用を不能にしてしまった。

やがて中尾城主以下城兵一同がほろ酔い気分で風に吹かれながら帰城したところを、久木野城兵がすかさず襲撃、一方的に中尾城を滅ぼした。また、猜疑心の強い久木野城主は、氣脈を通じて加担し勝利に導いた高寺をやがて滅亡させてしまった。それ以来、久木野郷には寺院の存在を禁止してしまったと伝えられている。

ちなみに、中尾城が落城したとき、城主が詠んだと伝えられる謎解きの歌が残されているが、いずれも城郭の一端に財宝を埋めたことを暗にほのめかしたものと思われる。

“朝日蔭夕日輝く木のもとに、うるし千倍朱千倍〇〇”(戸北郡誌)

”朝日蔭夕日輝くしのめ竹、朱甕三本金甕三本”(古老談)

(注)中尾城は亀の城ともいった。

# 元山丹波庄衛門物語

昔、ここ大川村は、肥藤国境に接する土地柄だけに、住人は常に周囲からの脅威に晒され、いつからともなく武勇の地として名を残した。

大川村から寺床村へ行く途中の西野に、元山丹波(一名を庄左衛門)という剣道の達人がいた。庄左衛門は剣術のほかに早歩きの名人ともいわれ、その足の早さは、菅笠を胸に置いて手を添えずに歩いても落ちなかったといい、また、夕刻に大川を発ち八代まで辻斬りに出かけ、その夜のうちに家に帰りついたというのだから、恐ろしい足の早さであった。

気の向くままに振る舞う荒々しい性格の持ち主であつたらしく、ある日、庄左衛門の門口に案内を請う一人の山伏があつた。幾たびか庄左衛門に面接を申し入れ、また家に居た母親もこれを取りなしたが、彼は相手にしないばかりか口汚く罵った。山伏も遂に諦めたか、ひとしきり法螺貝を吹き鳴らして立ち去った。それを見ていた母親は「いま立ち去った山伏が吹いた法螺貝は逆さ貝であつた。逆さ貝を吹かれると一家一村に災難がふりかかると昔から言われてる……」といて気をもみ、わが子の仕打ちを戒しめた。それを聞いて彼は無言のまま家を飛び出した。先の山伏のあとを急いで追いかけて、約五〇〇メートルぐらい行ったところで追いつくなり、唯一刀のもとに切ってしまった。

山伏の祟りを恐れた村人たちは、その遺体を懇に葬り、そこに楠を植えたが、ここを「ヤンボシ塚」と言うようになった。そして、昔からここに来ると災難がふりかかると恐れられていた。

しかし、今から二十数年前道路や河川工事などのため整理されたので、今では昔を偲ぶ何物も残っていない。また、元山丹波庄左衛門には次のような伝説もある。

ある年のこと、庄左衛門は芦北、八代を経て球磨地方に遊びに出かけての帰り道、一勝地の山道にさしかかったとき、前方に山こに弁当をぶら下げ、のんびり歩いていく一人の百姓風の男があつた。これを見た庄左衛門は、いつものいたずら気がむらむらと頭をもたげ、ついでに弁当も取って食べてやろうと足を早めた。

無言で近づきやいなや白刃一閃、山この中ほどから見事に弁当もろとも切り落としてしまった。鋭い気合いに腰を抜かすかと思われた百姓風の男は、目にも止らぬ身軽さで二の太刀を避けると同時に、手元に残った半分の山こは唸りを生じて庄左衛門の頭上に振り下ろされた。辛くも身をかわした庄左衛門は、切りこむどころかただ防戦に必死で、あわや危なくなつたとき、ニッコリ笑つた男は何事もなか

ったような静かさで、無言のまま立ち去ってしまった。呆然と見送った庄左衛門は、よほど恐ろしかったとみえて、帰宅の後「もう二度と一勝地には行かぬ」とよく人に話していたという。

西野字の小別のそばに苔生した墓石があるが、これが元山丹波庄左衛門の墓と伝えられている。

(注)山こ=山鉾、担い棒

水俣市史「民族・人物編」より

# 住吉神社にまつわる伝説



住吉神社は旧久木野村の氏神で、足利時代、嘉吉三年(一四四三)に建立された。伝説によると日当野村では白鷺が飛んでくると何事か異変が起るといわれ、村では鶏さえも白色のものは飼わないことになっていた。

この白色禁止については次のような言い伝えがある。

当時、足利幕府から厳重な探索の指令が出ていたある重罪犯人がいた。追っ手の目を逃れて肥後路を山手にとっていた犯人は、久木野の山中に身をひそめていたが、探索の網は刻々に縮められ、ついに犯人は日当野の住吉神社境内の池のほとりにそびえる老木によじ登り、枝の繁みに身を隠していた。

一方追手の一行は木蔭や岩蔭などに気を配りながら住吉神社までたどりつき、渴き切った喉を池の水で潤おそうと池をのぞきこんだ。そのとき、水面に一羽の白鷺が写っているのを見た。

稍から、はらはらしながらじーっと見ていた犯人は「神様、どうか見つからないように・・・」と祈った。しかし、住吉様は犯人の願いを聞いてはくれなかった。追手の一人が池に写った白鷺を見ようとして何気なく、ふと木の上を見上げたとき、犯人は見つかってしまった。

追手は神社が聖域であることも忘れて慌てて弓矢を射こみ、遂に鮮血を池の水に散らしながら転落してきた犯人を逮捕した。犯人は「白鷺さえ飛んでこなければ・・・」と悔しがった。そして、死刑になるとき「白鷺が飛んでこなければ逃げのびたのに・・・」と独り言をいって、最後には「日当野むらに白鷺が飛びくれば何事か起ころん」とわめき刑場の露と消えたという。

以来、今日まで血によって汚された池の水は涸れてしまい、雨で一時溜ってもなぜかすぐに水はなくなってしまうようになった。そしてこのことがあってから日当野の村人は白鷺が飛んでくるのを忌み嫌うようになったという。

また、一説には当時久木野に逃げこんだ犯人は二人であったといわれ、一人は住吉神社へ分け入り、一人は現久木野小学校わきの西きんどうの一軒家に逃げこみ、一杯のお茶を請うた。その家の主人、白坂某はかねて手配中の重罪犯人であることをいち早く察知したが、心よく求めに応じるような風を装いながら、やにわにお茶を犯人の面上に投げつけ、たちまち必死の組み打ちが始まった。組んずほぐれつ激闘数刻、遂に主人は庭にあった馬の鞍で犯人を抑えつけ、ホッと一息ついた途端、犯人は隠し持った短刀で主人の脇腹めがけて突き上げた。「アッ、やられた!!」と、周囲の者は色を失ったが、幸いにも懐に入れていた鏡が切っ先を防ぎ、ようやく犯人を逮捕することができ家族のものもホッと胸をなでおろしたという。

水俣市史「民族・人物編」より

# 松尾城

久木野三城の一つといわれる松尾城跡は、大川字松尾の旧大川分校裏山の上部にある。頂上に登ればゆるやかな勾配の嶺があり、西側は大関山に連なっている。中世のころの戦国の世に、薩摩の島津と球磨の相良との戦いのときの出城ではなかったかといわれている。

その昔、松尾城落城後、ある日村人が竹の子採りに城跡の山に登ったところ、元は武士だったらしい威厳のある白髪の老人に出会った。ところがその村人は家に帰りつくとすぐ高熱にうなされ、得体に知れない病に苦しんだという。これを聞いた対人たちは、落城の折の戦いで討ち死にした城兵の怨念の祟りだといって、それからは城跡に近づく者はいなかったと言い伝えが残っている。

この松尾城の続く大関山系は、明治十年の西南戦争の折、水俣最後の戦いに薩軍が陣地構築をしたところで「ヤケイ」と呼んだ。(当時の古文書には焼入とある)。ヤケイの周囲には高さ四、五尺(約一、五メートル)幅四、五尺ぐらいの空壕りがいくつか残っている。銃撃戦に備えた塹壕の跡という。

水俣市史「民族・人物編」より

# 障り除け地蔵さん

ある日のこと、この新開地に一人の坊さんがぶらりと訪れた。多分仏道修業のため行乞をしながらこの地に入りこんできたのであろう。坊さんは純朴な村人たちの厚意で、掘っ建て小屋に住んでしばらく滞在し、毎日あちらこちらの村を托鉢して回り、その日暮らしをしながら仏道修業に励んでいた。

ところが、しばらく坊さんの姿が見えないので、村人が小屋を訪ねてみると、坊さんはすでに亡くなっていた。村人たちには身寄りもわからないので坊さんの骸を仕方なく、田んぼの一角に埋めてやった。

何年か経て村人たちが坊さんのことはすっかり忘れ去っていたころ、村の長老で鶴田源吾という爺さんが、ある日原因不明の病に患った。やれ医者だ薬だと一生懸命養生したけれども、病気は一向に治らず、どうしたものかと悩んでいると、今度は近くの村人が気が狂うようになり、あちこちに病人が出たり次々と村中に不幸が重なった。

そのころ、鶴村にオタ婆さんという「呪い師」が住んでおり、どんなことでもよく当たるといって大変な評判だったので、源吾爺さんは溺れるものは藁をもつかむの例えで、オタ婆さんに占いをたてたところ「それは坊さんの障りじゃ。埋めたところに地蔵さんを建てて供養すれば、障りは立ち所に消えるぞよ・・・」と呪いの卦が出た。源吾爺さんは早速小さな石彫りの地蔵さんを石工に頼んで現地に建て、懇ろに供養した。

呪いが効いたのかその後源吾爺さんの病気は治り、また村の中から災難も取り除かれ、平和な日々が甦ったと語りつがれている。

現地の地蔵さんは、もと在ったところから約二メートル離れた、一段高い田の畦の少し広い空地のところに移転してあるが、この地蔵さんの台座部分には次のように刻まれており、今でも子孫の人たちが供養をつづけている。

台座に刻まれた文字「昭和十五年旧七月七日、コレカラハサワリナシ、鶴田源吾建立」

# 惣市どん屋敷

今から百四、五十年ぐらい前、無田村に惣市という人が住んでいた。この人は金儲けの天才で、どうして稼いだのかわからないが村で評判の金持ちと噂されていた。

ある日、布袋に二包みのお金(天保銭)をいっぱい詰めて、近くの家を持って行き、「錢ば家に置いとけばぬすど(盗人)にねらわるって、こん錢ば預かってくれんかい」と、畳の上にザラザラ・・・とばらまいた。

それを見てびっくり仰天した隣人は怖くなり、「いやいや、こげんうんとこせん錢な預かりきらんばい。ほかんもんに頼まん」と断った。

仕方がないので他の家に頼んで、やっと預かってもらった。

惣市どんはしばらく経ったある日、予言は的中、二人組の盗賊に襲われ殺されてしまった。そして賊が家の中をくまなく探したが大金はとうとう見つからなかったという話が村人に広がった。

その後村人の間に誰言うことなく「惣市どん屋敷にや金がいっぱい理まっ取るげな」という噂が流れた。しかし、誰も掘り返してみた者もなく噂だけが残った。

今でも村はずれの桧山に「惣市どん屋敷」といって石垣をめぐらしていた屋敷跡が一部残っている。ちなみに、お金を預かった家はいつの間にか栄えたが、子孫に総継ぎが生まれず何時のころか絶えてしまったと言う。

(注)こげんうんとこせん錢な＝こんなにたくさんの錢は。



# 中木場の地頭さん

中小場集落の西のはずれに石の地頭さんが祭ってある。地頭さんと呼んでいるのは、ただ単に地蔵菩薩のことだけではなく、この付近一帯の地名といった方が適切と思われる。

この地頭さん一帯は、昔も今も古狸が人を化かすというて村人たちが怖がっているところで、数々の面白い話が語りつがれている。

大川の柳平に、佐藤源之十という士分の人がいた(佐藤武熊氏の四代ぐらい前の祖)。当時久木野の手永会所(役所)が現在の小学校校庭にあった。佐藤源之十も他の士分の人びととこの会所に毎日一里余り(五キロメートル程度)の道を歩いて出仕していた。その往復の道は幅一メートルぐらいで、上ったり下ったり曲がりくねった小道で、当時はおそらく民家もわずかしかなかったし、特に田頭と中小場の間は現在でもそうであるが人家は全くなかった。

源之十の会所からの帰りは遅く暗くなる日が多かった、夜更けの山道は誰しも気が小さくなるもので、大小を腰にした源之十も決して気持ちのよいものではなかった。

ある日、彼は腰が抜けるような出来事に出会った。いつものように夜中に近い時刻、ほろ酔い気分がこの小道を帰っていると、月明かりの中に前方で多くの人びとがたむろしているのが見えた。何事だろうかと静かに近づいて見ると、一人の若い女の死体を老婆やおかみさん風の女四、五人がお湯を使ってふいていた。葬式の時の湯灌の儀式である。その周囲には女、子供が目を赤くしてすすり泣いていた。やがておこぞり(髪を剃ること)が済み静かに棺に納めると、すすり泣きが一段と高まり、儀式の列が動き出した。源之十は何気なくその死人の顔を見ると、自分の娘にそっくりだったので、何とも言えない気持ちになって、目を閉じ合掌し「ナムアミダブツ」と唱えた。そして静かに目を開けると目の前の葬式の列かき消えて、枯れ草の中に呆然と立ちつくす我が身の周りには、冷たい夜霧が流れていた。

冷水を浴びたような身震いを覚え、我に返った源之十はしばし立ちすくんだまま動くことができなかった。

源之十はこの不思議な出来事にあってから、身を清め一心に地蔵さんを刻んでこの地に安置した。それが今も道端に鎮座されている地頭さんだと伝えられている。佐藤源之十の願いがこもったこの地蔵さんは、今も風雪に耐え道行く人々に安心を与え、慈愛の眼を注いでおられる。地域の人たちは時々思い出してはこの

村はずれの地頭さんにお供え物をして拝んでいる。

水俣市史「民族・人物編」より

# 日当野の一夜城

天正十五年(一五八七)豊臣秀吉は天下統一のため、薩摩の島津征伐を終えて悠々と帰途についた。

往きは水俣を経て薩摩出水筋の表街道を通ったが、還りは薩摩大口筋の裏街道を、同年五月十八日、川内から平佐～山崎～鶴田～大□の曾木を経て五月二十七日酉の刻(午後六時ごろ)日当野に着いて一泊の夜営を結んだ。

この地を村人は「一夜城」と呼んでいる。(肥後国誌には「將軍山、秀吉公御陣営アリシヨリ地名トス」とある)

場所は、旧大口筋往還の久木野から前坂を登り切った日当野集落の入口で、現在は日当野集落から古里有木に通ずる市道が、集落を抜け切る左上部の山腹に、一部分平らな所がある。この地に野営をして一夜を明かし、翌朝、秀吉が起きてみたらちょうど日の出で、朝日が輝き日当たりがよく何ともいえないすがすがしい朝であったので、この地を日当野と名づけたという言い伝えが残っている。

二十八日ここを出発して久木野での猩々坂を越え、上木場を通過、途中、兵の士気を鼓舞するため湯浦の古石の岩間伏あたりで鹿狩りを催した。このとき獲物を隠れて待つための「まぶし」を、石を積んであっちこちにこしらえたので、この地を石間伏と名づけたという。

またこの一角に高さ一丈(約三メートル)ばかりの、上部が平らになっている幅六尺(約二メートル)、長さ二間(約三、六メートル)ほどの自然石が、中の段と下の段と分かれ、ベッドさながらの形をした「太閤岩」と呼ばれる大岩がる。これは鹿狩のとき秀吉がこの大岩の上のうえで休憩し、一夜を明かしたと語り伝えられている。

水俣市史「民族・人物編」より

# 無田のヤンボシ塚

江戸幕府のころ、薩摩の国は特に排他性が強く、当時幕府の隠密については異常なほどの警戒心をもっていた。

あるとき、関所の二人の役人が、かねて隠密の疑いで目をつけていた虚無僧姿の山法師を尾行していた。

役人は薩摩の小川内関所から約十三町(約一、四キロメートル)肥薩の国境に近い五女木という小村まで尾行してきた。この五女木には山村に似合わぬ稀な美人がいる・・・と近郷近在でも評判であった。追手の役人はあちこち探索するうち、例の美女とばったり出会った。役人たちもかねてからの顔見知りであったので、ひそかにこの美女に尋ねると「そのヤンボシどんなら、うち泊まっといやっど」といって懐から二分銀を出して「こん銭なヤンボシどんからもれもしたど・・・・・・」と見せた。

役人は、法師が見るからに筋骨逞しい大男で、尋常な手段では討てないと見ていた。そこで一計を案じ、この美女を説得し、法師が寝しずまったころソーッと刀の目釘を抜いておくように頼みこんだ。

ある日、山法師が美女の家を出たあとを、役人二人は相手に気付かれぬように尾行した。ちょうど肥薩国境を越え、丸石坂(無田)の下りにさしかかったところで追いつき、突如二人は同時に山法師目がけて切りかかった。法師は余程剣に自信があったのか軽くかわして、やおら仕込み杖の鞘を払い、大上段に振りかぶり、気合もろとも振り下ろした。途端に目釘を抜かれた刀は鏝元から抜け、サッと中天に飛んでいった。すかさず二人は切りこんでようやく法師をし止めることができた。

役人らはほっと一息つくと、わが手段の卑劣さを省みて自責の念にかられ、せめて遺体だけでも懇ろに葬ってやろうと、無由の桂池東方約三〇〇メートルの旧街道から約二〇メートルの道上に埋葬し、その上に大石を建てて吊ってやったという。ここを今も「ヤンボシ塚」といって、杉山の中に倒れかかった大石が遠い昔を物語るかのように建っている。

(注)以上の伝説のほか、この「ヤンボシ」は二人組の強盗に襲われて殺されたという説もあるが、今ではその真相を知る手段もない。

# 龍王物語



今から昔に遡ること四〇〇年余りの天正の半ば、水俣を含む芦北、八代地方は人吉藩相良家の領域であったが、天正九年二月、島津義久の進攻を支えきれず、ときの藩主相良義陽公は島津の軍門に降り、人吉藩の芦北支配はこのときをもって終わった。義陽公には、頼貞という腹違いの弟があったが事々に意見が合わず、薩摩と内通しているという疑いから八代の古麓城に幽閉されていたが、義陽公の戦死を知ると再び謀反を企て、後離を恐れた家臣団によって自害させられてしまった。頼貞の一子龍王は、当時十三歳であったが武勇に優れ、一家再興の念抑え難く、ある嵐の夜、城を脱出し白馬を駆って水俣に辿り着き南福寺の龍山に隠れ住んだ。それから龍王は、ここを仮の宿として日々の糧を得ながら母の故郷（一説には高尾野ともいう）への思慕とお家再興の念に燃えていた。

ある日、農家の下男が龍山々麓に草払いに来た。ひと仕事ののち谷川の水で喉を潤し、一服しながら見るとはなしに小川のせせらぎを見ていると、それまで澄んでいた水が薄く白く濁ってきた。「どうしてだろう」と不思議に思いながらなおも見つめていると、一尺足らずの細い木の枝が二本、間隔をおいて流れてきた。木の枝は半分が皮をむかれて白くなっている。「箸だ」、下男は思った。「さっき水が白く濁ったのは米を磨いた汁だったのだ、この上に人が住んでいる」。下男はこの山中に住む人が誰なのか、すぐ下に村里があるのにどうしてだろうと思うと、その人を見てみたい衝動に駆られた。下男は繁った雑木や草を払いながら谷川沿いに登り始めた。四町も登っただろうか、木陰に白いものの動くのを見た。馬も下男の気配を感じたのか一声高く嘶いて後足で棒立ちになった。龍土は「何事か」と洞窟の中

からとびだしてきて、洞窟の入口にたたずむ下男に驚いた。しかし直感的に相手が武士でないことを見てとった龍王は、いささか安心した様子で、「私は子細あってここに住んでいるので、このことは絶対他言しないように」と頼み、約束の証にと腰刀を与えた。

家に帰った下男は、貰ってきた腰刀を誰にも気付かれないように、自分の身回り品のなかに隠したが、これまで見たこともない立派な作りの腰刀が気になって仕方なく、主人や奉公人たちの目を盗んでは腰刀を取り出して見惚れていた。隠しごとはいつまでも続くものではない。下男がときどき姿が見えなくなることに気付いた主人は、ある日下男を使いに出し、その留守に下男の身の回り品を調べてみた。そこには主人がこれまで見たこともない立派な腰刀が隠されていた。主人は「これは徒ならぬことだ」と感じ、帰ってきた下男を問い詰めた。初め「死んでも言えない」と言っていた下男も、主人の執拗な折檻について事の総てを白状してしまった。

「龍王発見」の報は直ちに城代に達し、地士深水郷右衛門の率いる一団は龍山々中に踏み込んだ、如何に武勇に優れた龍王といえども、未だ十三歳の身で多勢に無勢、抗する術もなく無念にも愛馬もろとも討ち取られてしまった。ところが、それからのち、そば降る雨の夜には、龍山の漆黒の空を白馬に乗って天駆ける怒りに狂う龍王の姿が見られるようになり、深水郷右衛門の家には次々と不幸が続いたので、郷右衛門は心尽くしの祠を建てて龍王の霊を吊ったという。もともと龍山は「立山」であったが、里人たちがあまりの恐ろしさに「龍山」と呼ぶようになったということである。

水俣市史「民族・人物編」より

# 涙の別れ石

久木野寒川の集落がまだ独立した小村で、家数が四軒しかなかった江戸時代末期のころ、この村に弥九郎という人が住んでいた。この人は大へんな変わり者で、「どうせ明日も、がまだせば汗ん出て汚るつとじゃつで・・・」と絶対に風呂には入らない男であった。

弥九郎にはセンという見るからに健康にはち切れんばかりの娘がいた。山深い百姓の家に生まれ育ち、小さいころから家の暮らしを助け、働きづくめで若者などの語らいなどに恵まれない環境にあって、当時三十八歳になってまだ独身であった。ある日のこと、薩摩川内から来たという山伏がこの寒川村を訪れた。昔は修行のため山野に野宿して村人を行乞しながら渡り歩く修験僧や修験者がいた。おそらくこの山伏もその類の者であったろう。

古代から絶ゆことなく湧き出る水源に恵まれた寒川村は、修験者によっては格好の地であったのである。

山伏はしばらく滞在しているうちに狭い村のこと、山伏とセンは知り合う機会に恵まれた。このとき山伏は四十四歳の分別のある男勝りであったが、センを一目見たときから熱烈な恋心を抱くようになった。

“遠くて近きは男女の仲” そのうちに山伏の情熱にほだされたのか、センも山伏をほのかに恋い慕うようになった。密かに逢瀬を重ねるうちに二人の仲はますます燃え盛っていった。狭い山村のこと、噂は村中に広がり、もう黙っていても逢瀬をつづけられなくなり、山伏はこの恋の成就のために、思い切って父親弥九郎に娘センとの結婚を申し出した。しかし変わり者の父親は「何処ん馬ん骨かわからんヤンボシに、娘は絶対やらん!!」と剣もほろろに拒絶した。その後も何回となく頼みに行ったが全く受け付けず、後ではセンにも逢うことを禁じ、家の者にまで「山伏が来ても絶対家に入れちゃならん!!」と厳しく申し付けて絶対に寄せつけなかった。

逢うことすら禁ぜられた山伏はどうしようもない心情にかられたが、遂にセンとの結婚を断念して、センの家の川向うの山中にある大石に、センとの別れの言葉を刻みつけて、やがて寒川村から姿を消してしまった。

悲しんだセンは、悲恋に終わった山伏が惜別の言葉を刻んだ大石に毎日逢いに行き、その石を撫でながら一生を独身で通したという。

そのことを知った村人はこの石を「涙の別れ石」と呼ぶようになったという。

明治二十八年三月、寒川儀三という人が、この石に刻まれた文章を書き残している。判読すれば次のようだ。

「比の石に○し者にわ○○○○○○○○○○と○り○○あゝなさけない川○○川の流れ○○○  
雨風しので○○○センよ先の世で出合ってよい花をさかせよ也」  
明治二十八年三月吉日 寒川儀三(現、古里内匠頭氏の祖父)

水俣市史「民族・人物編」より



# 瞽女湊

大川の川頭川と寺床川の合流地点に瞽女湊と呼んでいるところがある。この湊には、哀れな門付けの女にまつわる次のような話が語り継がれている。

ある暮れやすい秋の日の昼下がり、静かなこの山里に時ならぬ三味の音が聞こえてきた。見ると一人の男に手を引かれながら、家家の門から門を波り弾く、うら若い瞽女の撥の音であった。

どういう縁に結ばれた二人であったかは分からないが、手を引き引かれる仲睦まじそうな姿とは裏腹に、二人の間には心の底では激しい争いが秘められていた。男は、常日ごろから足手まといな盲目の女を捨て、儂い旅芸人のくらしから逃れようとその機会をうかがっていた。それとは知らぬ女は、よるべない盲目の身で、身も心も一筋に男の心にとりすがり、旅寝の一刻も油断なく男に逃げ出す機会を与えぬように、心の中では絶えず目に見えぬ嫉妬と激しい争いの中に不安な旅路を続けていた。日を重ねるうちに、男の心にはひと思いに女を殺そうと恐ろしい企みが頭をもたげるようになった。

ある日、男は「望みのない二人の将来を生き長らえて苦しい旅路を続けるより、いっそ、ひと思いにこの世を去り、あの世で二人の楽しい世界を求めようではないか」と、言葉巧みに心中話をもちかけた。女はいつになく優しい男の言葉に心うたれ、感激の涙の中に死出の旅路を選ぶことになった。

やがて二人は青黒く淀んだこの湊の大岩の上に立った。まず男が「では、俺が先に飛び込むが、あの世は必ず二人で幸せに・・・」というより早く、「ドボン」と激しい水音があたりの静けさを被った。遅れてはならじと女も彼を追い飛びこんだ。瞽女の姿は再び水面に現れることはなかった。

しかし、最初に飛びこんだ水音は、男がいつの間にか用意した大石を投げこんだ音で、盲目の悲しさ、無情な男の計略にだまされて、哀れにも儂い夢を追って死んでいった。その後、この話を聞いた村人たちはこの湊を瞽女湊と呼ぶようになり、だまされて哀れな最後を遂げた女の冥福を祈ったという。

この瞽女湊も大正十二年の大洪水で旧街道が消失したことから、湊は埋まってしまい往年の碧色の深い湊は無くなり、さらにその後の河川工事によって当時の大岩も姿を消してしまった。

(注) 瞽女＝盲目の門付け三味線弾きの女

水俣市史「民族・人物編」より

# 松木どん

遠い昔の話、中小場の村の中程に小高い丘があり、そこに大きな松の木が数本生えていた。その木立ちの中に、いつのころからか草屋をむすび、世間を逃れて隠れ住む貴人らしい人と従者数人が住みついていた。

そのころは久木野郷全体でも家は数えるほどしかない時代で、そんな淋しいところへ世をはばかって住みついた人は一体何者なのか。村人は誰言うもなく、平家の落人だろうと語り合っていた。直接たずねてもただ微笑むだけで確かな返事は返ってこなかった。おそらく、五家荘や椎葉地方に逃れた平家の一族で、細々と平家の血脈を守り、巡りくる季節を待っていたのかも知れない。着けている衣装や言葉づかい、それに立ち居振る舞いにも都人の香りが漂っていた。

しかし、待てど暮らせどこの人たちには再び春は巡ってこなかった。雨露をしのぐだけの小屋住まいの生活は並み大抵の貧しさではなく、かつて栄華に奢った都の生活を思えば、なんととも惨めで、見守る人びとにも栄枯盛衰の無常をしみじみと感じさせた。

貧しい生活に疲れ果てた松木の住人たちは、やがて一人減り二人死んだりして遂には主従二人だけになってしまったが、そのうち従者も倒れてしまい、それからというものの高貴な人は、自らも食を絶ってしまったらしく、村人が夜にたずねていき「食事はすみなはったか」と問いかければ、「はい、いま、すみました」と答えていたが、いっこうに炊事の煙りは見られなかった。それに村人が時折り届ける団子や果物も一切断って、瞑想にふける日々であったが、ある日、遂に帰らぬ人となってしまった。

松の木の住人たちは、平家再興のための資金を沢山持っていたと、誰言うともなく村人の耳から耳へ伝わった。

その後、その資金やこの小屋で見かけた立派な食器やツボなどの家財は一体どうなったのか、しばらくして村人は不思議な石を発見した。それは平たい石に「旭輝く夕日影さす石橋の下、しののめ一本、朱千ばい、大判小判千無量」と刻まれていた。

村人は、これは松木の住人が財宝を埋めた目印を刻んだものと噂し、それらしいところを発掘する人が後を絶たなかったという。今でも土木工事などで掘り返されると、もしや宝物が出ないかと誰もが気をつけて見回しているが、まだ、見つかった話はない。

松木の住人が住んでいたというところを「松木どん」と呼んでいる。十数年前まで

は松の大木や雑草がうっそうと繁っていたが、今では裸地になってしまい、その中心に墓らしい跡があり、近所の人たちが時折花や果物を供えている。水俣市史「民族・人物編」より

# 鬼の歯形石



鹿児島県との県境、神川(かみのかわ)から袋、月浦(つきのうら)、坂口を経て侍(さむらい)の集落を過ぎると、広々とした畑地が広がる。昔は御内家畑と言われた栢山で、栢の木の下を利用して畑作が行われてきた。俗にいう侍台地で、薩摩の殿様が参勤交代の際に通ったという薩摩街道がこの侍台地を横断し、陣の坂へと下っている。西南戦争のとき、西郷軍が大砲の牽引に苦労した難所だったが、その道筋に「峠の地藏」が鎮座されている。

昔、新地山(現在の山手町の裏山)に鬼の一族が住んでいた。岩を並べたり、重ねたり、あるいは洞穴を掘ったりして大きな岩屋に住んでいたが、だんだん家族が増えて窮屈になってきた。鬼たちは、ある晩に寄っていろいろ相談した結果、岩屋を増築することになった。そこで主だった鬼たち数人が、峠の地藏さんに建て増しの許可をお願いに行った。

「地藏さん、おっどが家ん窮屈になったで、ちいっとばかり建て増しばしゅうと思いますがよかでっしゅか」これを聞いた地藏さんは、これは困ったもんだ。鬼どんが増えて住むところの狭(せ)もなれば何処さねかはってくじゃろと思っとったが、建て増しば認むれば鬼どんなどんどん増ゆっとじゃが、こらあ何とか条件ば付けんばいかんばいと考えた。そこで地藏さんは「お前どんな悪さばっかるして評判のゆうなかで、なんもかんも言うごて認めるにはいかんとたい。そっで明日ん朝、一番鶏の鳴くまでに造りあぐんなら許そうたい。そるばってんかそるまで出来上がらんときゃ認めんことにするがよかかい。」と条件付きで認めることにした。

鬼たちは、日が暮れるのを待って岩屋造りにとりかかった。しかし新地山の岩は硬くて細工がしにくいので、天草島の軟らかい石を掘り出しては投げ、掘り出して

は投げして死に物狂いで作業を進めたが、まだ夜が明けないうちに一番鶏の鳴く声が東の方から聞こえてきた。夜明けまではまだ時間があるから出来上がるだろうと思っていた鬼たちはびっくり仰天、それでも地蔵さんの「作業止めー」のひと声に、不承不承ながらも作業を中止して引き上げた。

そのとき、鬼の一人が切齒扼腕(せつしやくわん)、腹立ちまぎれに、地蔵さんの近くにあった岩に思いっきり噛みついた。その石は「鬼の歯形石」と言われて、今も陣の坂に残っている。

それからのちは、鬼たちが村人に悪さをしようとするとならず鶏が鳴き、鬼たちはその声を嫌って岩屋に逃げ帰り、村人たちは平穏な日々を送れるようになったという。

村人たちは鶏にお礼をしようと、ある日の朝、鶏の鳴き声を頼りに探して行くと、それは秋葉山の頂上にある大岩から聞こえていたので、この大岩を“鶏石”と呼ぶようになったということである。

水俣市史「民族・人物編」より

# 鬼の材石



むかし、湯出の七滝の一つである大滝の近くに鬼の一族が住んでいた。家族が増えて棲家が狭くなったので、新しく家を造りたいと思って、鬼嶽の神様にお願いに行った。

神さまは、家を新築して鬼たちが長く住みついては村人が困るだろうと思ったが、神様としては、人も鬼も神の子として平等に扱わなければならないと思い、「お前どま、力の強かで明日ん朝、一番鶏が鳴く前に造り上げんば認めん」と条件をつけて許可した。

鬼たちは一生懸命働いた。神様は気になるので夜明け前に様子を見に行った。作業は順調に進んで、この調子なら夜明けまでに出来上がるように思えた。

神様は、「これは困ったことになった」と思ったが、一計を案じて山に帰り、‘たかんばっちょ’を持って下りてきた。大滝の近くの木々の繁みに隠れた神様は、大きな声で「コケコッコー」と鳴き声をあげて、たかんばっちょをバタバタ、バタバタと叩いて、鶏が羽ばたきする音をたてた。

鬼たちは、一番鶏が鳴いたものと思い込み、残念そうに桜野上場の方へと引き揚げて行ったが、桜野上場の方から見下ろすと大滝の方はまだ暗闇の中だったので、鬼の大將は「さては騙されたか」と腹を立て、道端の大石を力いっぱい拳骨で突いたので、その大石には穴があいた。大石は今も道端に残っているという。

水俣市史「民族・人物編」より

# みんみん滝



市の中心街、旭町四つ角から湯の鶴方面へ約四キロメートル、大窪の集落を過ぎて間もなく、右手に高くそびえる山の中腹あたりに、赤い岩肌を見せる切り立った断崖が遠望できる。水が流れているわけではないが、この岩を「みんみん滝」と呼び、継母にいじめられ逝った悲しい子どもの物語が伝えられている。

まだ家の数軒もない山間の集落に、三郎という子どもが居た。母とは死に別れ、父が再婚した後妻とその連れ子の四人暮らしであったが、その継母の三郎に対する仕打ちは日に日に激しさを増していた。

三郎の毎朝の日課は水汲みであった。今朝も汲んできた水が少ないと母が怒鳴りつけた。遠くの泉から汲んできた水は、途中の凹凸道で足をとられたときにこぼして、かなりの量が減っていた。わずか十一歳の三郎には、大人が担ぐ水桶は余りにも大きかったし、泉からの道のりは遠かった。にもかかわらず母は「見てんなこん子は、おるば馬鹿にしてたったこしこしか汲んで来んとじゃつで」と、夫に向かってなじるように言う。だがそんなことはいつものことで、三郎にはまだ我慢のできることであった。

三郎は、今朝もいつものように食事の前に亡き母を偲んで仏壇に手を合わせていた。すると「三郎!!いつまでぐずぐずしとつか。飯にや蠅ん止まるとるが……。あん子はおるが言うこていっちょいっちょひねくれっ、おっ母さんの位牌に告げ口しおつとじゃろ、うんにゃ、おるが早よいつ死ぬごつ仏さんに祈つとつとじゃろ、面んきん憎かこん親不幸もんが」と言って、仏壇の前に来ると三郎の襟首を取って引き倒し、腰のあたりを嫌というほど蹴とばした。三郎がいくら弁解してもそんなことを聞き入れる



母ではなかったの、三郎はただじい一つと唇を噛んで耐えるほかはなかった。母はそれでも飽き足らず、このことを夫に言いつけた。

「こん子はほんなこて恐ろしか子ばい。おら、継母ち思わるごてなかばっかり、でくするしこんこたしてやとつとに、ゆうすればするしこひねくれっ、おれむかつとじゃつで。今も仏さんの前、永う座つとるもんじゃつで行たつ見たらおれ聞こゆるごて『仏さん、いんちんおつ母さんな鬼じゃつで、早よ死なせつくれんな』ち頼みおつとばい。いくらわが子んでん、あげんこつ言われるれば腹ん立って仕様んなかがな。あんたも時にゃ怒ってくれんば」これを聞いて、日頃は優しく庇っていた父も、今日ばかりは激しく叱った。

「三郎、わら、こげんよかおつ母さんにもがって、なしてそげん聞き分けんなかつか。おつ母さんが死ねごつち仏さんに詣つち何ちゆうこつか。そげん子はもうおるが子じゃなかで出て行け」いつもは陰になり日向になりして慰めてくれていた父から、こんなに強く怒られたのは初めてで、あまりの情なさで三郎の目からは大きな涙が一つ二つとこぼれた。

食事が終わり、後片付けを済ませ茶碗を洗った三郎は炊事場にじい一つとしゃがみ込んだ。かまどに残っている火を見つめていると、その火がだんだん大きな炎になって燃え上がり、あっという間に自分の体を包み込んでしまった。苦しく息が止まりそうだが、動かそうとしても動けない。その時、誰だか柔らかい手でじい一つと抱いてくれる人があった。ふり返ってみると、そこには死んだ母の慈愛に満ちた瞳が三郎をみつめていた。その手は優しく三郎の体を撫でていく。頭から肩へ、肩から胸へと。

「おつ母さん」三郎は思わずその手にすがった。母はしっかりと三郎を抱きしめてくれた。

母の胸に抱かれて、三郎の胸からは今までの悲しみがす一つと消え、ほのぼのとした暖かい春のような夢心地に浸ることができた。しかし、それも僅かな時間でしかなかった。

「こらっ、三郎、何んばへめへめしとつとか、今かる山、べら取り行くとじゃつで早ようったたんか」うしろから怒鳴る母の声に、ひとときの幸せに浸る三郎の夢は破られた。

急いで支度すると母のうしろに従った。梅雨明けの強い太陽が焼きつくように照りつける。ろくに食事もできずやせ細った三郎の足には、夏草の生い茂った山道を母について登るのはきつかった。やと山の中ほどに辿り着いた。そこは平らになっていて、大きな雑木林の中にはひと抱えもある松なども混っていて気味が悪いほど薄暗く、大きなかずらが大蛇のように木に巻きついてた。

「ほら、こげな櫛のよかべらんあつで、こん付近で取つぞ」母はそう言うと鉈でどんどんこだくり始めた。三郎はまだ鉈は使えないので、落ちていた枝を拾い、手で折って

は薪を作った。幼ない子どもの手では薪作りも思うにまかせない。見ると母はもうたくさんの枝を束ねている。三郎は、また「何ばへめへめしとつか!!」と怒られはしないかと内心びくびくしていると、母は何を思ったか優しい声で、「三郎、もじよなげ手から血の出とるがね、わら、まだ小まんかで無理じゃもんね。もうよかで休んどれ、おっ母さんがまちとと取れば一荷でくつで、そるまで待つとれ」と言った。

まだ大人の心の機微を読み取れない三郎は、人が変わったように優しく言う母を少しも疑わなかった。

「今日は早よ済んだで、いつとき休んでいこい」薪を取り終わった母はそう言った。母は三郎の手を取って雑木林のはずれの方へ歩いた。そこは木立ちがきれて青空がぼっかり広がり、足もとは目もくらむような切り立った崖になっていた。遠くに川が流れ、その手前には田んぼが青々としていた。

「三郎、まちとこつちゃね来てんの、いんちの見ゆつで」三郎は恐る恐る前に出たが家は見えない。

「おっ母さん、おれな見えんばい」「まちと前さね来てんの、おっ母さんが掴まえてつで」母は怖がる三郎の手を取って引き寄せた。

「おっ母さん、恐ろしかでもう見らんちよか、もう見ん、見ん」身をよじらせ後ずさりする三郎を、力いっぱい引き寄せた母は、そのまま押し出すように手を離れた。

小さな三郎の体は「見ーん、見ーん」の声を残して宙に舞い、途中の岩角にぶつかりながら、血しぶきとともに落下していった。

鬼のような形相をしていた継母は、ニヤツと薄笑いをすると薪はそのままに山を駆け下り、如何にも一大事出来とばかりに、「大事ばい、三郎が、三郎が」とわめき散らした。

「どげんしたっかい。そげんすばとつ、三郎がどげんかしたつちや」三郎の父が家から飛び出してきた。

「三郎が崖ん上からひつちゃけたったい。大事ひんなった。どげんなつと助けくれんな」母は泣き崩れるようにして助けを求めた。それは世の名優も及ばない名演技であった。

急を聞いて近所の人たちも集まってきて、母の案内で三郎が落ちたという崖の下を探したが、いくら探してもそれらしい姿は見つからなかった。みんなが狐につままれたように茫然としていると、突然、目の前の草むらから一匹の蟬が羽音高く飛び立ち、崖の頂き付近の松の木にとまると、「みーん、みーん、みーん」と、今まで聞いたこともない声で鳴きだした。それはまるで人を恨むような、訴えるような悲しく哀調を帯びた鳴き声であった。

その鳴き声を聞いた途端、母の顔面は蒼白となり、目尻を吊り上げ狂ったように跳び回りながら大声で、「あら三郎ばい、三郎ばい、ほんなこつ三郎が蟬になったっばい」とわめき出した。周囲の者が怪訝顔で「何ちや、三郎が蟬になったつち、

どげん言うこつかい」と聞くと、「三郎は崖ん上で見—ん、見—んち泣きおったっばおるが突き落てたったい。三郎おるが悪かった、堪忍してくれい。おるが鬼じゃった」と言って泣き崩れたと思うと「ハハア、継子は死んだ。継子は死んだ。こるから楽しい。おらこるから楽のでくったい」と笑い転げた。

村人たちは、発狂した母の姿を見て総てを悟った。

「可哀想な三郎」、と父の頬には大きな涙が止めどなく流れた。

村人たちも目をうるませ崖の上を見上げた。そこには先ほどの蝉が「み—ん、み—ん」と消え入るような余韻を残して鳴き続けていた。

母は村人たちに抱きかかえられるようにしてわが家に帰ったが、程なく狂い死にしまった。

それからは、いつも夏のころになると、この崖の付近一帯にはもの悲しい“みんな”の蝉“の音が聞こえるようになり、岩を染めた赤い血は風雨にさらされながらも消えることなく染みついている。

この崖を人呼んで“みんな”滝“と言い、またの名を“赤岩”ともいう。

水俣市史「民族・人物編」より

# もて木川の母子悲話

むかし、むかし、まあだ道らしか道じゃなか、人が通って自然にでけた里道や、獣の往き来でいつの間にかでけた山道ば利用しとったころのこつじゃった。

もてぎ川の川向こうの山間に、母一人子一人の睦まじい親子が住んどった。ある年の梅雨どきじゃった。連日の雨で暮らしに欠かせん塩ば切らしてしもうて、どげんしてん川向こうの店まで買いに行かんばならんごつなつた。長雨で川ん水は増えとつたが、そころは橋もなし、増水した川ば渡つとは大変なこつじゃった。こんな日に幼児ば買もん連れて行くこた誰が考えてん無理で、気がかりじゃばってん家に置いとくほかはなかつた。雨も小降りになつたので今のうちにと思つた母親は「おせんよ、すぐ戻って来つて、母ちゃんが帰るまじゃ決して外に出ちゃならんばい。言うこつば聞いておとなしゅうしとれば、飴んちよば買うてきてくるつて、決して家から出んばい」母は幼児にくどくどと言ひ聞かせて、小雨の中を蓑にタカンバッチョ笠をかぶつて急いで家を出た。一人残つた「せん」は、母が居なくなると途端に淋しくなり、そしてだんだん心細うなつて、どうしようもなか切羽詰まつた気持ちに追い込まれ、母の注意もうち忘れて戸外に飛び出し、狂うたごて泣き叫び母親の後ば追つて一目散にかけ出した。氣ばかり焦つてつっこけまんこけ、泥だらけになつて坂道ば駆け下り、もて木川のせんのひらにたどり着いたとき、母親はやつとんこつて向こう岸に渡り着き、店の方へと急いどつた。

川にたどり着いた「せん」は、遙か川向こうの道ば急ぎ足で行く母を見つけ、「かあちゃん……」と泣き叫びながら母の名を呼んどつたが、思いきつて川ば渡ろうとした。

一方、母親は後髪ば引かるる思いで道ば急いどると、ふと、わが子の叫ぶ声が聞こえたような気がしてうしろばふり返つてみると、いまにも川を渡ろうとしとる「せん」の姿に、「アーツ、しもうたツ」と思ひ、「そこば動くなーツ、じつとしとれ、今行くでー」と声を限りに叫び、宙を飛ぶ思いで川にとつて返した。

だが、母の叫び声も増水した流れの音にかき消され「せん」には届かなかつた。「せん」は思いきつて渡ろうとして急流に目がくらみ、アツという間に流れに呑みこまれてしもうた。息急き切つて駆けつけた母は、「せん」を助ける一心で我を忘れて激流に飛び込んだ。だが、早い流れに押し流され、我が子を救うどころか母親も濁流に呑まれてしもうた。

その後、村人たちの必死の搜索にもかかわらず、母子の亡骸さえ見つからんじゃつたそうじゃ。

それからのち、梅雨どきなどに大水が出れば、せんのひら辺りから「母ちゃん……」「おせんよー……」と、流された母と子の相呼ぶ悲しく切なか叫び声を、村人たちはよく聞いたち話じゃ。

(注) タカンバッチョ笠……昔、雨降りにかぶった竹の皮で編んだ笠

つっこけまんこけ……つまずき転ぶことを強調した言葉

せんのひら……本井木にある地名

やっとんこつで……やっとのことで

水俣市史「民族・人物編」より

# 井川平のオサンジヨと宇土陣のスグルワ ラ

水俣の民話に登場する狐狸族の中で、井川平のオサンジヨは一番の知恵者といわれ、優秀な演技力をもっていたそうで、なかでも嫁入り道中の演出はことのほかの出色であったという。

井川平のオサンジヨは、棲家の井川平を本拠に宇土山、上野の原あたりまでを勢力範囲としていたらしく、この地域ではオサンジヨにまつわる話が数多く聞かれたようだが、今はそれを知る人も語る人も容易には見つからない。

大正時代から昭和の初めにかけて、この地区からチツソ水俣工場に勤務した人たちの中には、随分とオサンジヨにからかわれた人も居たようで、特に三交替勤務者のなかに多かったようだ。前夜勤帰りに自宅に帰って寝た積りが中尾山の麓に寝ていたり、宇土山のてっぺんに寝ていたり、あるいは前夜勤帰りによか娘からぼた餅を貰い、うきうきとして持ち帰り新聞紙を開けてみたら馬糞だったというような話はいくらか聞かれた。

宇土陣のスグルワラは悪戯が好きで、農家が丹精こめて育て苦労して刈り取って、稲掛けに乾してある稲穂をスグリ取って回るのが得意で、村人たちはまたあ奴にやられたと悩まされることが多かった。スグルワラの名もここから生まれたものだろう。

オサンジヨはその後、宇土陣のスグルワラと結婚したと言われ、そのときは一世一代の嫁入り行列を披露したという。このときばかりは、どこから持って来たのか本物の嫁入り道具を揃え、それを人間に化けた一族の狐どもに担がせていた。そして提灯を持った仲人役に案内された花嫁行列は、井川平から宇土陣に向かって南福寺の田んぼ道を肅々と進んで行ったといわれ、その見事な花嫁行列は誰もが見とれんばかりで、出会った村人たちはあまりの美しさに舌を巻いて眺めていたという。

水俣市史「民族・人物編」より

# 嘉平じいさんとカラス

むかし、むかし、日当野ン村に嘉平という爺さんが住んどった。嘉平爺さんな縁側で孫ん守りばしながる日向ぼっこばしとった。

村ん真ん中にそびえとる大銀杏の木にゃ、カラスが二、三羽とまりガアガア騒いどった。いつの間にか孫は縁側の暖かい日ざしにに気持ちよう眠ってしもうた静かな昼下がり、爺さんな何ば思いついたつか、眠っとる孫はうっちょいて、二の坂ン山こばば耕しに出かけらいた。すると大銀杏の木のとっぺんに止まっとるカラスの一羽が、杖どんついてトボトボ歩いて行く爺さんばみて、「カヒョー、カヒョー、クワは」と鳴いた。

嘉平爺さんな、ああ、そうじゃった、鍬ば忘れちゃ仕事ならんばい、と取りに戻らいた。鍬を担いで喉ばゼーゼー鳴らしながら登って行くと、今度は別なカラスが「カヒョー、カヒョー、トンコは」と鳴いた。嘉平爺さんは、ああ、そうそう、トンコは忘れとったばいと思出し、取りに戻り、ふうふう言いながらまた登って行くと、「カヒョー、カヒョー、マゴは」と、また別なカラスが鳴いた。嘉平爺さんな、アラほんなこて、と大事な孫ばいっちょいてきたことば思出し、大銀杏のてっぺんば見上げながら、しよしな顔して慌てて家に戻らした。

おかげで日半分、二の坂ば登り下りして、畑仕事はできんじゃったげな。今でいう健忘症ちいうやつじゃったっじゃろたいなア。

(注) トンコ……昔の刻み煙草入れ

しよしな顔……きまり悪げな顔。

水俣市史「民族・人物編」より

# 河童の恩返し

浜ン広田どんが子供ンころ、夏休みにゃ久木野ン叔母さんが家よう遊びに行き、近くの竹下淵に泳ぎ行きおった。竹下淵はいつも碧々と水ばたたえて、ほんなこて河童の棲みそうな淵じゃった。

ある日、友達とバチャバチャ泳いどったら、浅瀬から急に深みにはまってうんぶくれそうになった。アップ、アップしとっと突然おなかあたりがぬーくなって、何かわからんばってん腹ば下から支えられたごたる感じになり、溺れるどころか水面に浮いとるごつ軽うなった。こんこつがあつてから彼は急に泳ぎがうまくなった。子供心にも不思議に思うたが、「こらあきつと河童が俺に泳ぎば教えてくれたっばい」。そげん思うと彼は河童に何かお礼せんばならんち思うて、叔母さんの家に戻りつくと今日の出来ごつば一部始終話し、次の日叔母さんからソウメンと河童の大好きな胡瓜ばもらい、河童にお礼ば言うて川の深みにそれば流した。それから安心して泳ぐこつがで、だんだん泳ぎも上手になつたげな。そして泳いだあとはいつも友達と一緒に魚ば捕って遊びおった。

しばらく経つたある日のこと。みんな遊び疲れてそろそろ家に帰ると、みんなが着物ば脱いどつとげ行くと、彼のところにゃ鮠や鮒などがいっぱい串刺しにして置いてあつた。彼は町の子じゃつて魚捕りは上手じゃなかつたで、狐につままれたごたる気持ちでおつとこれ友達が来て、そん魚ば見てびっくり。

「そげんうんとこせ、ぬしが捕つたっや」と聞いたばってん、彼はあいまいに、「うん、うん」と答えるしかなかつたたい。

家に持って帰ると叔母さんはいさぎゅう喜んだ。彼は「これもきつと河童にソウメンと胡瓜ばご馳走したお返しじゃろう」と考え、それから毎日叔母からもろうて供え物ばした。しかし、そんなころ農家の暮らしや貧乏じゃつたで、ソウメンな、いっでんかっでん食べられるちゆうわけにやいかんじゃつた。

ある日、「もう、そしこ持っていけばよかがね。もったいなかでもう持っていくな」と叔母に止められた。ばってん彼の心は納まらず、その後は叔母にかくして持っていくごつなつた。叔母はそんなこつばちゃんんと知つとつたばってん黙って知らんふりをしとつた。

それから暫らく経つたある日のこと、「今日はこれば持って行かんね」と言って、ご仏飯の中に線香の灰ば包み込んで持たせつやつた。何ンも知らん彼は叔母の言うごつ持って行き、いつもんごて川に流した。



遊びだれてさあ帰ろうと思い、着物ば脱いだとこに行くと、いきなりニューツと岩かげから河童が出てきた。

ハッと驚く彼に「もうお別れだね。あしたから会えんごつなつたばい。長い間有難うな」と言うよか早よ手を振ってドボーンと水底に消えてしもうた。

突然のこつで、彼はなんでそうなつたのか、そんな時にゃ理解できんじやつたばってん、そんな自分一人の胸ン中に納めて誰にも言わんじやつた。そんな訳がわかつたのは彼が大人になってからじやつた。—河童との仲が悪うなるごつ、叔母さんが河童の一番嫌いな線香の灰ばお仏飯に入れたからじゃな—と。

昔から子供が川遊びに行くときゃ親たちから、川遊び行くとならお仏飯ば食うて行け」とよく言われとつたこつば思い出した。折角、河童と仲良しになつたち喜んだつもいつとときに間、暮らしが貧しかばっかりに河童が一番嫌いなこつばしてしもうたたい。そるばってん、利口な河童はそのいきさつば一部始終知つとつたじやつろ、そんな証拠にゃ普通なら悪賢か河童じゃばってん、そんな後も、彼には何ンもいたずらはせんじやつたち話したい。

(注)うんぶくれそうになつた……………溺れそうになつた。

いつでんかってん……………いつでも。常に。始終。

遊びだれて……………遊びつかれて

水俣市史「民族・人物編」より

# 寒川の水天宮と河童

寒川ん水源にゃ水天宮さんがおられる。昔は地元の人たちや朝夕は決して水源にゃ近づかんごてしとったそうじゃ。なしてかちゅうと、水天宮さんが朝と夕方ん二回、久木野ん村中の河童たちは集めて、悪かこつせんごつ訓示ばせらす時間じゃって、邪魔せんごつせろち言われとったげな。村ん衆はそん綻ばず一つと守とったから、久木野ん河童は決して意地悪ばするようなこたせんじゃった。

さて、こん村に弥丸郎ちいうばかりゆどんがおらった。ある日のこつ、牛ば引いて八代まで行く途中、二見の君が淵に辿り着き、牛を引いたまま川に入り渡り始むと、今まで何ごつもなく青々と澄んどった淵の水が、急に糊のごてドロドロになって身動きとれんごつなり、牛もろとも弥丸郎どんな淵の中に引っ込まれそうになった。びっくりした弥丸郎どんが苦しまぎれに、

「おらあ、久木野ん寒川ん水天さんの氏子じゃぞーッ!!」と太か声で叫んだ。

ところが、あら不思議や淵の水はたちまち元んごつなって、ひとつしかなか命が助かったち話たい。それほど寒川ん水天さんな位いが高うして、靈験あらたかなご利益があつたち言われとったばい。

水俣市史「民族・人物編」より

# 鬼嶽と矢筈山

肥後と薩摩との国境にそびえる鬼嶽と矢筈山は仲が悪く、何かにつけて喧嘩合っていた。

「鬼嶽ば見てんの、頭は鞍坊主のごつして見たむなか。あっじゃ嫁ごん来てもなからうたい」矢筈はいつもそげんこつば仲間にしゃべっていた。

しょっちゅうこんな悪口を言われていた鬼嶽は、とうとう我慢しきれずに矢筈の所まで押しかけて行き、口論の末に足で矢筈の胸ば蹴っ飛ばした。それからというもの、回りの山々も鬼嶽派と矢筈派に分かれて争いはひどくなる一方であった。この様子を心配した仲間の山のなかから、「大喧嘩にならんうちに長老にとりなして貰おい」ということになり、長老の村東の山(現、無線山)のところに行き仲裁ば頼んだら、「あば背比べばさせみよい」ということになった。

村東の山は仲間の山に「鬼嶽から矢筈まで樋ばかけてみれば、どっちが高かわかったい」と言って、樋を作って渡すように言い付けた。

樋が出来上った日、俄に雨が降った。そして雨水は鬼嶽から矢筈の方へと流れ、これで鬼嶽の背が高いことがはっきりとわかった。

「やっば、うちの大將が高かったがね」鬼嶽の子分たちは鼻を高くした。

「おかしかねえ」矢筈の子分たちは腑に落ちないという顔で親分の姿をしげしげと眺めた。よく見ると矢筈の体はうしろに傾いている。

「どげんしたっじゃるか。うしろさん傾いとらっぞ」子分たちがささやき合った。

「おるが、こん前、腹かいてカいっぱい蹴飛ばしてくれたたい」鬼嶽が小声でつぶやいた。

「出来たこた仕方んかたい。高さは鬼嶽が上じゃばってん、男前は矢筈が上たい。それに矢筈はよか嫁ごば持つとるじゃなかか。こるからみんな仲ゆうして、湯の鶴の人間どむから好かるっごつならばんぞ」長老の村東の山が言った。

みんなは太か声で「ハーイ、こるから仲ゆうします」と答えた。そるからは、東の鬼嶽さんと西の矢筈さんは向かい合って、仲ゆう暮らしとんなるち話たい。

# 金神どん

むかし、古里の田頭に「こんじんどん」ちゆう神さんがおらったげな。こん神さんなあんまり目立たんじゃったばつてん、いさぎゆう運の良うなる神さんで、お参りすれば金がようぬさるちいわれとった。

ある日、村ん衆が寄り合いばして村ん中に農道ば造るごて決めた。ところが具合の悪かこてな、そん道ば通すところに金神どんが座つとらすもんじゃつて、ほかんとこれ移さんばんごつなつたたい。金神どんな石でできとつたで、村ん長老どんが代表で金神どんにお願いばせらしたげな。

「金神どん、金神どん、村中で話し合いばして、こげ農道ば造るごつ決まったで、ほかんとげ移ってもらわんまんばつてん、移ってよかれば軽うならんな。移るごたなかなら重うならんな」と頼まったちたい。そしたら、いつの間にか軽うならしたげな。お陰で何か月か経って素晴らしか農道が出来上がったそうな。

金神どんば移したところは石で囲み、回りに南天の木ば三本植えて、村中で祀ったそうたい。なして三本植えたか、その訳は誰も知つとるもんなおらんじゃった。また、そん訳ば詮索するもんな銭のぬさらんごつなるち言われ、尋ぬる者なおらんじゃったそうじゃ。

今じゃ南天が何本も生えており、石も無くなってしもうたので、どれがどれだかわからんごつなつてしもうたたい。

(注)ぬさる……授かるの意

水俣市史「民族・人物編」より

# 山神さんの話

古里田頭の南の方に車道ちゆうこーまか道があった。こっから東へ一キロメートルばかり行った山のなけ、山神さんがおんなった。この山神さんの回りの山は雑木山で、そこは炭焼きがいさぎゅう流行つとった。

ある日んこつ、一人の炭焼きどんがこの山神さんばみて、「田頭村にゃ神さんなおらっさんとじゃが、こん山神さんば村に移したらどげんじゃるか」と言い出した。村人たちは、そるば聞いて「ほんなこつ、そらよかばい」と皆が賛成して、山神さんば村にお迎えしゅうちこて決まった。

明けん朝、村んもんな大勢で山神さんば運びに行った。運ぶ前に村で一番えらか人が「山神さん、山神さん、おどんが村にゃ神様がおられんで、ああたば村に肥ろうごたっでお連れしげ来たっじゃがなあ、なおってよかれは軽うなってくれんかな」とお願いせらしたげなたい。そしたら神様は一人で持ち上げられるごて軽うならしたっちたい。村んもんな喜んで村なかに運ぶこてなつた。そして神様ば困うであつた石垣やそんまま残して、神様だけば荷車に乗せて運び、村で一番高つか山に安置して祀らつたたい。

それから村にゃ良かこつばかり続いた。山にゃわらび・つわ・ぜんまいがいっぱい生え、畑にゃ大根・黒芋・人参・白菜、なんでも豊作が続いたで、山神さんによいつもお供え物がいっぱいじゃつた。

しばらく経って、南の方の山じゃ炭焼きどんの炭窯造りが盛んじゃつた。炭窯造りにゃ石がいるもんじゃつて、石を探しに山ん中ばあっちこっち回つた。すると綺麗な石が円ば描いたごて並うどつとこれ行き当たり、炭焼きどんな「これ、これ」と喜んでこん石ば運んで来て、早速炭窯ば造りにかかつた。ところが、くあげして二日後にゃ、くが落ちて壊れてしもうた。また造つた。また壊れた。こげんこつば何度か繰り返しとつたが、仕事にならんもんじゃつて、ある偉かお坊さんに聞きに行かしたところが、炭窯の回りに積んである石は、もと山神さんの回りば困んどつた石で、神様ば運ぶときそのまま残したもんち分かつた。炭焼きどんな早速こん石ば村ん中に移した山神さんにお返ししたので、あとの仕事は順調にいっていさぎゅう儲かつたち話たい。

(注) くあげ……土を盛り上げ打ち固めて、炭窯の形が出来上ること。

# 座頭滝物語

下村の村外れの川端に、どこから来たのか一人の座頭が柴小屋を造って住みつき、近くの村々を琵琶を弾いてまわり、日々の糧をもらって暮らしていた。

年も暮れて、正月がきた。座頭は下村の家々を門付けして回った。村人たちは、めでたい正月を迎えて気嫌よく、「座頭どん、今日は元日じゃってこっち寄って一杯飲まんのか」と言って、家ごとにご馳走してくれた。

すっかり酔いのまわった座頭は、自分の小屋に帰ろうと谷川に架かった丸木橋を渡り始めたが、橋の中ほどまで来たとき、足元が狂って踏みはずし、ざんぶと川の中に落ちて、したたか腰を打って立てなくなった。

日暮れ時、村の作じいさんが水神さんにお神酒を上げに来て座頭どんを見つけ、「座頭どん、お前や何ばしととや」と声をかけた。座頭は消え入るような声で「人はみんな正月と言うばってん、わしゃ寒さにガツカツ震えとつたい」作じいさんは急いで村に帰り、若者ば四、五人連れて座頭どんば助けに来てみたが、橋の下にその姿はなかった。

「たしかに、この下ん川ん中おったっじゃが、どけ行ったっじやるか」みんなは、暗くなった辺りを探した。そんな時、向こうの滝壺から「ヒョイ、ヒョイ、ヒョイ」という河童の声が聞こえてきた。

「ハハー、がわんばっちょどが、座頭どんの葬式ばしてくるとぞね」と、みんなは手を合わせて念仏を唱えた。

いま、その滝壺は湯出七滝の一つ「座頭滝」として、訪れる人も多い。

水俣市史「民族・人物編」より

# 三番曲がりの古狸

むかし、岩井川内から山木場に行く途中の三番曲りと呼んどの付近に、大きな古狸が棲んでおったげな。こん狸ゃ三番曲りへんから大境の先の荒平あたりまでば縄張りにしとって、山道の寂しか場所に、目ン覚むるごたるよか女子に化けて、通るもんば片っ端から騙くらかして良か気色になとった。ここは昔しゃとにかく大木の繁って昼でん薄暗うしてわざばいかごたる藪くら道じゃった。“こっけ狸に化かされる“ちゅう噂が広がり、夜更けは滅多に人は通るうとせんじゃった。

ある晩のこつ、一人の男が抜き差しならん用件で仕様んなしにここを通りかかった。なるべく周囲は見らんごつして道ば急いどった。どんくらい歩いたろうか。生ぬっか風がふわっつと男の面ばひとなでした。男はふつと顔ば上げて何の気なしに前の方ば見た。すると目ん前が明るうなって、そけよか女ごの立つとるじゃなかな、男は一目見るなり物の化に憑かれたごっなって、わがば忘れてうつとりと、そんよか女ごに見とれてしもうたげな。わが肝心の用件もうちやすれてたい。……女ごはいかにも親しかもんにでも会うたごつ、「今晚は、どちらへ行きなさつとですか」「……」「よろしかったら家に寄って、お茶でも飲んで行きなさらんですか」と近づき手を取った。男は魂のつくわんげたごて、ふらふらと女ごの後について行った。

男は立派な家に入り部屋に通された。

「風呂が沸いとります。どうぞ……」すすめられるままに男はひと風呂浴びた。部屋に戻るといつの間にせしこうたつか、珍らしかご馳走が並び、美女の酌に夢見る気色になって酔くろうてしまい、あとはどげんなったか訳くちゃ分からんごっなって、その晩な酔い潰れて泊まってしもうた。

明け方の冷たい風に男はふと目ば覚ますと、山ン中に落葉ばひっかぶって寝とった。あたりにゃよんべの御殿のごたる家も美女の姿も消え失せて、付近には馬ん糞だけが散らばとった。

正気にもどった男はわが身の異様な匂いに、さては狸にだまされたかと気づくと、真っ青になって山野の荒平方面に向かって一目散に走り出した。昨夜の風呂は野壺で、出されたご馳走は馬糞じゃったげな。

(注) わざばいか……恐ろしいこと。怖いこと。

魂のつくわんげた……魂が抜けた様。

よんべ……………タベ。昨夜。

野壺……………野外にある肥溜

水俣市史「民族・人物編」より



# 山の神

昔から水俣辺りでは、山の神はオコゼ(虎魚)が好きだといわれているが、その故事は次のようである。

大昔、山の神に一人の娘神がいた。この娘神は年頃になって、どうしたことから急に部屋にこもって食事にも出てこなくなった。

母神が心配して、娘神にその訳を尋ねてみると、娘は「谷川に下った時、ふと澄み切った谷川の水に自分の顔が写ったのを見て、そのあまりにも醜い自分の顔に驚き、悲観して死んでしまいたくなり、食事も喉を通りません」と言った。

それを聞いた母神は、「なんだ、そんなことだったのか、この世の中にはまだまだお前よりも醜いものがある。ひとつも心配することはない」と慰めた。

すると娘神は「それなら、そんな醜いものは何でしょう？ 私に是非見せて下さい」と母神にせがんだ。それならと、母神は若者を海に走らせ、オコゼを捕ってこさせて娘神に見せた。

それを見た娘神は「ハッハッハー、これは本当に醜い顔をしている」と、大声を出して笑い出したが、それから機嫌をよくした山の神は、オコゼをいつも自分の側に置いて居たとかで、それから「山の神はオコゼが好き」と言われるようになったそうである。

こうした故事に習ってか、昔の狩人たちはオコゼを求めて百枚の和紙に包み、お神酒と一緒に山の神にお供えて山の神を喜ばせ、山での安全と豊猟を願った。そして、狩りで山に入る時には必ず山の神にお参りして、オコゼを包んだ和紙を一枚頂き、それを身につけてお守りとした。その紙がなくなると、また新しいオコゼを求めて同じ様に和紙にくるんで奉納した。

山の神に供えたオコゼは、山の獣たちに失敬されずにミイラになっても残っているが、それはオコゼの背びれに毒針があることを狐や狸どもが知っていたからかも知れない。また、腐らないでミイラ化するまでに残っているのは、昔の和紙が蠅などの産卵を防ぐ役目を果たしていたからではなかろうか。

さらに、山の神がオコゼを好まれることについては、次のような話もある。

オコゼは「顔は一番醜い魚だが、腹の中はどんな魚よりもきれいである」(オコゼの内臓は非常に美味しい)したがって、山の神が顔のきれいな者よりも邪心のない腹(心)のきれいな人を好かれるということは、邪心は災禍を招き、正心は難を逃れるの道理を教えているものであろうと。

また昔は、女房のことを山の神といったが、これは女房が一般の家庭では苦しい家計を束ねる唯一その家の守り神的な存在であったからであろう。

そして山の神が自分より醜いオコゼが好きだということは、女性の嫉妬心の強さを物語っているのかも知れない。

水俣市史「民族・人物編」より

# 山わろの話

わしが十七のときじゃった。佐敷に牛飼いに行って帰り道の話たい。

山上ンばかりゆどんと二人、良かめた牛の手に入ったもんじゃって、喜び勇んで鼻唄どん歌いながる、ちょうど湯浦ン三十丁坂ン途中、湧水の出っとこれさしかかったたい。峠も近かで水どん飲んで休憩して行こうち言うて道端ン石に腰ばおろそうとしたとき、道上ン杉山ン中かゝる突然ガサガサ音がして何か通るごたる気配のしたもんじゃって、つい若気の至りで足許ン石ば拾うて二、三回投げつけたたい。そして構わずに水どん呑んで登って行くと、暗か杉山ン中からとつけんなか孟宗竹ば叩くごたる音が激しゅう聞こえてくつとたい。魂がった牛は急に気の狂うたごて暴れ出し、綱ば引っこなさんごて騒動するもんじゃってわざばゆうなって、ばかりゆどんに助けば求むと、

「おまいが石ば投げたりすって、山ん神さんの腹かかしたたい。山ば通るとき淋しゅうなったり、怖か思いばすつときゃ、決して山ん神さんの悪口ば言うたりいたずらばしちゃんらんとたい。ことわけば言うて謝れ」

と、きびしゅう言われたもんじゃって、

「山ん神さん、山ん神さん、若気の至りで悪かこつばして済んませんでした。こるから気をつけますで、どうか許して下さい」ち、手を合わせて謝ったたい。途端にあれほど激しかった音も止んで、牛もおとなしゅうなったもんじゃってほっと胸ばなでおろし、無事家に戻り着いたばってん、あん時や肝ん玉んすつ飛んだばい。

昔の人ん言わすこたあ、よう聞かんばいかなあち、そんな時つくづく思うたこつですたい。

(注) ばかりゆどん……家畜商。馬喰ともいう。

めた牛……雌牛

とつけんなか……思いもつかぬこと

わざばゆうなって……怖くなって、恐ろしくなって。

# 山姥の話

むかし、大川内に一人の樵夫が住んどった。ある日奥山に入って材木ば切り倒しておると、突然目の前に山姥か何かわからん異様な女子が出てきて、「お前は、わたしば怒ろしか女子が出て来たち思うとつどが？山姥か川女かどっちだろうかと迷うとるじゃろが。ほら、いま、どげんして逃ぎゅうかち思うとつどが」と、その女ごは樵夫が思うとるこつや考えとるこつばいっちょいっちょ言い当てるので、なお恐ろしゅうなあってガタガタ震えとった。

「はあ、これが山姥とちゅうとばいなあ」と思いながら、わがでも気づかんうちに木の小枝ば手に取って膝にあて、ポキッと力いっばいへし折った。ところが真ん中で二つに折れた切れっ端が、そん女子の向う面にパシッち音んするごて当たった。本人さえ全く思いがけんなかこてなった出来ごつに、この山姥の神通力も通ぜんじゃったっじゃろ、「お前は思わんこつばする男じゃな」と言い捨てて、姿ば消してしもうたちゅう話じゃ。

“無意識に思いがけんなかこつばする人は怖か“ちゅう戒めで、さすがの山姥も手が出らんじゃったち話たい。

水俣市史「民族・人物編」より

# 時鳥の話

昔から水俣辺りでは、時鳥の鳴き声を「タンタンタケジョオトトワケサボ………」と言ったが、その由来について親たちは、次のような話を寝物語にしてくれた。

むかし、あるところに丈丞と袈裟坊という二人の兄弟が暮らしていた。兄の丈丞は子どものころから目が見えず、弟の世話になりながら暮らしていたが、目が見えないためか非常に僻み根性が強く「俺にゃ粟や稗んホラばかり食わせっ、自分な旨か米ん飯ば食いよっとじゃろう」と、いつも弟の袈裟坊を恨んでいた。

ある年のことであった。大飢饉で米や麦、粟など全く穫れず、袈裟坊は兄を養うために山に行き、山芋や木の実を取って必死の思いで兄に食べさせていた。心の優しい兄想いの袈裟坊は、兄には山芋の根っ子の美味しいところや、木の実を食べさせ、自分は灰汁の強い山芋の首のところや木の皮をかじり、トカゲまで食べて飢えを凌いでいた。

袈裟坊は、そうした食い物で次第に身体は痩せ細り、腹だけが膨れてとうとう栄養失調で寝込んでしまった。弟が寝込んでしまっていることに気付いた兄の丈丞は「俺にゃいみしか物ばかり食わせっ、我がは旨か物ばかり食うて肥え過ぎっ動けんじゃろう」と感違いして腹を立て、手探りで包丁を探し出し、寝ている袈裟坊の膨れた腹を「エイッ」とひと刺して殺してしまった。

すると袈裟坊の腹から出てきた物は、木の皮や木の根に混じってトカゲなどであった。それを手探りで知った兄の丈丞は、びっくりして「俺が悪かった。許してくれい。袈裟坊、お前はこげん物ば食って、俺がため食い物ば探してくれとったっか。誠済まんじゃった」と袈裟坊の遺体にすがりついて泣いた。

それから何日も袈裟坊の遺体の側で泣き続けた丈丞は、「こげん兄思いじゃったお前ば殺してしもつ済まんじゃった。許してくれい。俺も袈裟坊、汝が側に行くで」と、自分も包丁を喉に突き刺して死んでしまった。

ところが、その瞬間に丈丞の体は一羽の鳥となって、初夏の森の中に飛んで行った。そして「タンタン、タケジョ、オトトハケサボ。ホンゾンカケタカ、ホンゾントゲタカ、オトトハ、ケサボ」と蹄いたそうな、それが時鳥であるという。丈丞の化身である時鳥は、弟の袈裟坊に申し訳なかったという詫びる気持ちから、トカゲを獲って食べながら、初夏の若葉が萌える山から山へと、一日に八千八遍、悲しみを込めて血を吐く思いで蹄き続けているような。

この民話は、昔から一般的に水俣の人たちの中で語り伝えられてきた、ホトトギスにまつわる物語である。

（注）「タケジョ」と「ケサボ」は人名であるので、文中では「丈丞」、「袈裟坊」の漢字を当てた。

水俣市史「民族・人物編」より

# 谷道のこっけ狸

大関の山に赤い夕日が山肌ば染め、やがて鶴の村に灯がともりはじめる日暮れどき、今日も無事に山仕事ば終えて家路を急ぐ一人の若者がおった。手に持った袋の中の雑魚ば噛み噛み坂道ば登って行くと、ちょうど谷道にさしかかったときにゃ辺りは薄暗うなり、誰彼の見分けがつかんぐらいじゃった。と、そこへ「兄ちゃん、迎えに来たばい。どう、そん袋は俺やらんな、持って行くで」と緋の着物ば着た弟が道の真中に立っつた。兄「いんにやよか、軽かで」。弟「そいばってん、山仕事でだれたちがね」。兄「なんのなんの、袋いっちょぐらい何ちゆうこたなか」。弟「せっかく俺が迎えにきたとこれ…………」。

弟はしゃいがもっでん雑魚ん入った袋ば持たせろちいう。そんなとき、兄は明こ暗ん薄明かりのなかで、弟の緋模様があんまりはっきり見ゆつとに気がついた。

「こんわろが、俺ばだまくらかす気か」と足許にあった小石ば拾って投げつけた。

途端に弟は日当ン村ん人の飼い犬の「クマ」になって、一目散に山ん中へ逃げこうだけな。

兄は、大急ぎで家に戻り着くと、弟に、兄「わや、俺ば迎えに来たな？」弟「いんにゃ、なんの迎えに行こん、今さっきまで畑におったっじゃもね」と怪訝な顔して兄ば見た。兄は「ははあ、やっぱあれは、こっけ狸の仕業じゃったばい」と、あとで弟たちにさっきあったこつば一部始終話して聞かせたげなたい。

こん谷道のこっけ狸と二の坂んこっけ狸は村ん者がよう騙されるもんじゃって、一番怖がったちゆう話たい。

(注) しゃいがもっでん…………無理やりに、遮二無二、強引に

明こ暗ん…………黄昏、夕方。

わや…………久木野方言で、同僚以下の者への呼びかけ。水俣方面では「わら」

こっけ狸…………年老いた狸で、長い経験をつんでずるがしこい古狸

## 二の坂のおまん狸

二の坂の道筋ん山に「おまん」ちゅうこっけ狸が棲んどったげな。人間ば騙くらかすこた朝めし前、また歌が上手で人ばからこうては一人で？いや一匹で面白がった。噂ば聞いた人びとは、朝夕薄暗いうちやみんな怖がって、こん峠ば越ゆるもんなおらんじゃった。

ある日のこと、村の庄屋どんが、まだ明けきらん薄暗か中は愛馬に打ちまだがり、気に入りのお供えば一人従えて狩に行く途中、今日の獲物ばあれこれ想像しながら二の坂ば登つとらしたげなたい。

明けん明星が姿ば消すころ、坂ん途中の「下駄取り坂」ちゅうて、雨上がりじゃ下駄履いて通ればおっ取られるごつ粘り気ん強か赤粘土の坂道ばようよう登りきったとき、白々明けかけた朝露の中ば、庄屋どん方の下女がゼーゼー、ゼーゼー息ば切らしながら後ろから追いかけてきて、「旦那さん、旦那さん、奥さんが子供ん生まるっち騒動しとらすで、狩りは止めて早う帰って下はりませ」「なんてやッ、奥がお産を？……………」突然のこつで庄屋どんが一瞬めんくらわしたが……………、はて、今ごろ奥が子供ば産むはずはなか……………こらおかしかぞ？ハハア、こやつは「おまん狸」の仕業じゃな」瞬時に気付いたばってん、さすがは庄屋どんたい、顔には出さずいきなり馬ん上から腰の大刀を抜く手も見せず下女を目がけて切り払った。哀れにも「おまん」狸の首はころりと落ちて泣き別れ。

それからは、二の坂じゃ人間ば騙す狸は出らんごつなって、村人は安心して夜道でんこん坂ば越ゆるごてなっちゅう話たい。

水俣市史「民族・人物編」より



# 椿谷での珍事

ある年の夏も終わりに近いころ、父と子が町から山ひとつ越えた小田代に行ったときのことである。多々良から椿谷越えの山道は細く谷に添うように続いて雑木の林に覆われていた。その林を抜けると少しばかり拓けた集落があり、そこを侍村といた。

山越えの谷は椿が多く、花の咲く季節には甘い花の蜜の香に誘われて、メジロなどが多く群れ舞うところでもあり、椿谷の呼び名もそこから生まれたものであった。谷には水も少なく重なるような岩の間をわずかに見え隠れして、幽かな音をたてながら流れていた。時折、バサッと小鳥の樹間を飛び交う音がして、辺りは静かである。

親子は木の根や岩をよけ、落葉を踏みしめながらもう中ほどまでの道のりを来たであろうか。時刻は昼近い。少し汗ばんでいた。一息ついて谷を横切ろうとしたとき、父はふと立ち止まり、後からついてくる息子に後手で合図した。息子はひと休みするのだろうかと思つて父親を見た。父親は何かを見つけたらしく、前の岩陰の落葉の重なり合った凹みの気配を窺うようにして見ている。

そのうち、父は思いもよらない不思議なことを始めた。履いていた足半(かかどの短いわら草履)をヒョイと頭の上に乗せ、岩の間をしきりに見回している。子どもにすれば思いもしなかったことで、日ごろ厳格な父親が落葉のついた足半をかぐめた滑稽な格好よりも、その真剣な様子に一体何が起こったのか見当もつかなかった。父親は息子を振り返り、声を立てるなど合図して、手真似でお前も父の真似をせろという。子は言われるようにして、指差された岩の辺りを見てみるが、別に変わった様子はない。

暫くして、「もうはってつしもた。見えたろが?」、しかし子どもには何がいたのかよくわからず、薄く陽炎がチロチロと揺れ動いて、谷伝いに下のほうへ漂って行った感じがしただけ。

「何の、おったんな……?」息子は頭の上に乗せた足半をとって履きながら、初めて父に問うた。

「見えんじゃったんな、ガラツパどんのおらったがね。二、三匹はおらった。そるばつてん、なあーもせんば悪さはせんとたい」その行く手を横切ったり、妨げたりすると、熱が出て病み倒すという。

また、草履を頭にかぐめると、ガラツパには人が見えなくなり、人にはガラツパが見えると言うが、子どもには見えなかったようだ。

ガラツパ(河童)は山の神、川の神の使者とか川の神そのもので、秋には山に登って山の神になるとも言われ、人によっては見えたり見えなかつたりする、と思われていた明治のころの父と子の話である。

水俣市史「民族・人物編」より

# 底なし沼と逃げ口

昔、むかし、大川内の尾ヶ野近ぺんの山が活火山じゃったころ、そん噴火ででけた底なし沼ち言われとる池があつた。この池の付近が「池ノ元」ちゅう地名で呼ばれ、今も小字名で残つとったい。

そん村にいさぎゅうおどけもんがおつたげな。ある日、こん剽軽者がこの池ん端に遊びにきねた。むかしからこの池には大蛇が棲んどるちゅう言い伝えがあり、村人はみんな怖がってあんまり近づかんじゃったそうじゃ。ぼってんか、それまで大蛇ば見たという者なだーるもおらんじゃった。

剽軽者のこん男はついおどけた気持ちになり、池に向かって大声で「大蛇はおつとかあ!!、おつとなら出てこい!!」と呼んで、尻ばひっぱっておどけてペンペン叩いた。途端に生ぬーつか風が吹き出し、アツと思う間に今まで晴れとつた空が一ぺんに真っ黒か雲に覆われ、静かじゃった池の真ん中に突然水柱が立った。と同時に突如太か口ば開けて大蛇が水面に現れ、男めがけて襲いかかってきた。男はまさか大蛇がほんなこて出るちは思うてもおらんじゃったので、腰のつつかんぬぐるこてびっくりして、慌てふためき市ノ木の方さん藪くらばてんてこ舞して逃げたげな。男が逃げたところば逃げ口というて、今でん小字名が残つとるばい。

こん話しゃ、昔底なし沼ち言われとつたほどじゃから、子供たちが遊びに行つて誤つて沼に落ちこめば上がるこつができんから、沼に近づかんこつ戒めたもんじゃろち言われとる。今じゃ長い年月が経つて土砂で埋まつとるばってん、湿地で今でんはまれば上がるこつができんじゃろち言われとつたい。

水俣市史「民族・人物編」より

# 鉄砲撃ちと化け猫

明治の初めんころの話じゃ。獵師が囲炉裏端で鉄砲ん弾ば作つとる傍で、猫がジーツと弾の出来上つとば数えとったげな。獵師は、胸んうちで「こん野郎、俺が弾を作つとばいちいち数えとるばい」と気づき、「よし、よし、十四発も作ればよかじゃろ。明日の晩な猪待ち行くか」と、わざと猫に聞こゆるごつ独り言。

翌日、獵師は夕日がチロチロと山の木立ちの中に沈むころ、いつも行きつけの狩り場に着いた。風向きば考えっ、大急ぎで猪棚ば作った。昔は今んごつ狩り犬の飼育技術が進んどらんじゃったから良か狩り犬ば持つとる獵師は少なかったで、犬で追いつめて射止むつとじゃなか、猪が体ば地面にこすりつくる「ぬたうち場」ば見つけつ、傍に猪棚ば作って待ち伏せし、ぬたうちに来た猪ば直接ねらい撃ちしおったたい。

丑三つ時(真夜中、午前二時頃)、獵師が猪待ちしとったら、目ん前に突如ギラギラと目を光らせた怪物が現われた。獵師は「来たな」と身構えたが、よう見るとわが家ん嫁じゃなかな。

「じいさん、じいさん、お母さんが急病で苦しんどらっで、早よ帰ってくれんな」と言うたが、獵師は(嫁がここん狩り場ば知つとるはずはなか、こやつは化け猫に違いなか)と咄嗟に気づき、「よしッ!!嫁でん構わん。真夜中にこげん山奥に来る奴あ撃ち殺してやるわい!!」とわめいて鉄砲ば構えると、途端に正体を現わした化け猫は、ギャオーツと猫特有のうなり声ばあげて身構えた。獵師はすかさず猫ん眉間ば狙い撃ちした。するとカチンち金物に当たる音がした。獵師は続けざまに十四発を撃ってしもうた。撃った弾数ば数えとった化け猫は、獵師が弾ば使い果たしたもんと思ひこみ、かぶつとった鉄の鍋ばほたい投げて襲いかかろうちした。途端に心臓目がけて撃った弾に射抜かれた化け猫は、血反吐ば吐いて死んでしもうた。

前ん晩に獵師は猫に気づかれんごつ、鉄砲ん弾ば一発余分に作って弾込めしておいた。そこまで気づかんじゃった猫は油断したっが一巻の終わりじゃった。

獵師の機転で命拾いばしたちゅう話たい。

(注) ほたい投げ……放るようにして投げ捨てること。

# 田頭のお稻荷さん

むかし、古里の田頭に狐岩ちゅう狐ン棲家があった。そこは周囲を木に囲まれてったが、朝日ン射し込む明るか岩場でそげにゃ八〇匹から多かときゃ一〇〇匹の狐が棲んどったそうじゃ。狐が全部集まったときゃ、ちょうど黄色か布ば地面に敷きつめとるごたった。

こん狐たちや昼間は岩場で昼寝ばしたり、子狐たちやはらぐれしたりしとるぐうたらもんじゃったが、晩になると目の色ば変えて村里に下り、田畑の作物ば荒したり鶏ばおとって食ったりして、村ん衆に悪かこつばつかりしとった。

一人の村人が、狐の悪さすつとば見るに見兼ねて、こん狐岩ば焼きこさいでしまおうち考え、煙で燻し殺すこてした。

男はまず、燻す材料の杉の葉ば中小場、大川内、寺床、越小場あたりまで採りに行ったげな、拾い集めた杉の葉ば狐岩んそばに山んごてこずみ上げた。

明けん朝早く狐岩に行ってみると、狐たちやまだ寝とった。

男は「しめた!!」と思い、山んごてこずんだ杉の葉ば一把一把岩の回りにこ積みたて、「ざま見ろ」ち火ばつけた。

五時間も経つと、出頭はもちろん、上の方は中小場、大川内まで、下ん方は有木から久木野辺まで煙が一ぱい立ち込めた。村中があんまり煙たかもんじゃつて、焼くとば止めさしゆちしたばってん、男は頑として聞かんじゃったげな。

こんなことが七日七晩つづいて八日目の朝、ようやく火は消えたので、昼ごろ村ん衆たちが来て岩ん中ば見ると、親狐が子狐ば抱くごてして死んどった。

「まこて一、ぐらしかこつばしてしもうた」と呟くもんもおれば、泣き出すもんもおったげな。

煙で燻した男は、それから十日もせんうち死んでしもうた。村人は罰があたったといい、狐岩の近くにお稻荷さんば祀り、毎月揚げ豆腐などば供えて供養をしたそうじゃ。

その後の噂によれば、岩を燻したとき狐の一部は山奥に逃げ出し、そのなかの一部は人間に化けて水俣まで下り、船ば借りて乗りかえ乗りかえしながら中国に渡ったちゅう話じゃった。

(注) はらぐれ……戯れ合うこと。たわむれること。

焼きこさいで……焼き払って。

ぐらしか……………可哀想か。

水俣市史「民族・人物編」より

# 肥前陣の黒ベコ

侍村の肥前陣は、天正十五年四月、豊臣秀吉の島津征討に呼応して出征した肥前(佐賀藩)の軍勢が陣を構えたところで、その名があるが、黒ベコはそこを塹にしていた。

黒ベコは夜になると、黒禪をした裸の大男になって現われ、道行く人たちを驚かすのが得意で、“肥前陣の黒ベコ”と言って恐れられていたが、別に悪さをする事はなかったという。

ところが、水俣の町もだんだんと開け、山の麓も伐採され、チツソの工場も広がってきて、餌場になっていたところも次第になくなり、また空気も悪くなって暮らしにくくなったからか、暮らし馴れた肥前陣を離れることにした黒ベコは、ある日人間に化け、どこかの船頭さんを騙して長島(鹿児島)に渡してもらったそう。ところが、この船が長島の海岸に着くなり、その客人は船賃を船頭に払うと船から飛び降り、さっさと山の中に消えて行ったので、不思議に思った船頭がもらった船賃をよく見ると、それは全部木の葉じゃったという話である。

水俣市史「民族・人物編」より

# 茂田のモゼと多々良のタゼン

古賀村から丸島の丸山の麓に至る中道のほとりは一面の水田が広がり、ところどころに小笹や茅が生い繁る藪があり、月の無い夜は暗く人もあまり通らない道だった。民家の灯は遠くかすかにまたたき、月の出た夜は塩神様の大きい松の木が黒々と彼方に見える。この付近一帯が“茂田のモゼ”の縄張りであった。

夜遅く一人でこの中道を通ると提灯の火を消されてしまうとの話から、昼間は通る人が多かったが、夜になると滅多に通る人はいなかった。

モゼが現われるのは月の出ない漆黒の闇夜で、なぜか月夜には出なかった。

モゼの演技は、まず道の中ほどあたりで、歩いている人の前方にピンポン玉のような火の玉がふわりと現われ、一刻空中に漂っているかと思うと、次第にボール大になりパァーッと掻き消えてしまう。暫くすると、今度は一点に灯が点ったかと思うと、その灯が人の姿を形どったように大きくなり、かすかに明滅しながら近づいてくる。そして近くまで来たかと思うと突然に消えてしまう。

その灯は怖がる人ほどよく見えたといい、その灯に会った人は魂を失うほど怖かったそうだが、その美しさは夢幻の光を見ているように異様に美しかったとも言われている。

モゼはもともと合戦の物真似を得意とし、現在の第二中学校裏にある塩釜神社の側に陣取った一軍と、水俣青果市場辺りに布陣した一軍が、栄町から古賀一帯の田んぼを舞台に、両軍の兵隊が展開してパンパン銃声を鳴らしながら、中道辺りで攻めたり退いたりの見事な攻防戦を繰り広げて見せたそうである。これは激戦であった水俣での西南戦争を真似たものだったのだろうという。また、あるときは、田んぼの水を争って鎌で渡り合う闘争絵巻を展開して見せたこともあったといい、ある人は美女になって道案内をしてくれたと言う。

“茂田”の地名は記録にないが、中道一帯を指して呼んでいた。”モゼ“は年老いた狸であつたらしい。

多々良のタゼンは多々良山の主で、多々良山からチツソの裏山かけて縄張りをもっていたようである。

このタゼンは殿様行列が得意であった。多々良山から繰り出す行列は、先導の髭奴が提灯をチラつかせて下り始めると、それに続いて槍持奴、徒歩侍、その後には殿様の駕籠、その周りには近習と馬回り、後には刀番、六尺(道具持ち)が続



くなど、おそらくは薩摩藩島津公の参勤交代を真似たのであろうが、非常に念の入ったもので、当時塩田であった今のチッソ水俣工場の辺りをガヤガヤしながら通っていく様は、見飽きしなかったそうである。

そして、モゼとタゼンの両雄は、しとしと雨が降る夜などは、互いに持てる秘術をつくして、一方は合戦を、片方は殿様行列をと芸を争って見せたという。

水俣市史「民族・人物編」より

# 茂道山の巡查さん

ある日、狩人が茂道山に来て狸罌をそこかしこに仕掛けて道に出たところに、巡查さんがサーベル(西洋風の長刀)の音をカチャカチャさせながら近づいてきた。狩人は「しまった」と思ったがもう遅い。暗くなるまで山に隠れていればよかったと思いつつも、「こんにちわ」と挨拶をして頭をペコンと下げた。巡查は、「おいこら、お前はご法度(法律違反)の破裂玉ば狸に喰わせて捕っとるそうじゃが止めろ、止めんごたれば逮捕すつぞお、今度まじゃ見逃しとく」と言った。

狩人は「済みません、許して下さい」と言って何度も頭を下げた。

巡查は山道を村の方へ下って行ったので、狩人は、今度までは許すと言わしたでと思いつつも、罌をそのままにして帰った。

そして翌朝、狩人は罌のところに行ってみた。

すると、餌に使った狸の大好物の焼鼠を喰べて破裂したのか、焼鼠と一緒に一匹の大きな狸が腰に蔓の帯を締め、枯木の枝を一本差したまま、顎を打ち外して死んでいたという話じゃった。

# 毛抜きカッパ

昔、古里村ん下ば流れとる川は、六月の梅雨どきなると大雨んたんびにあふれて周りの田畑ば荒らし、村人たちに難儀ばかけとった。これじゃいかんちゅうこつで、村の石工どんが、

「川の荒れんごつ、堰ば造ろうじゃなかな」と言い出した。(この堰は今でいうダム  
の役目を果たすもの)村ん人たちもみんな協力して造ることになった。

この石工どんながまだし者で、雨の日も風の日も一日も休まず、時にゃ三日三  
晩一睡もせず工事ば続けるこつもあった。しばらく経ったある晩のこつ、石工どんが  
あんまりがまだし過ぎて急に高い熱ばうっ出し、そのまま寝こんでしもうた。

どんくらい眠ったろうか、寝とったら足の脛のあたりがチクチクするもんじゃつで、石  
工どんが足ば思いきって動かしてみた。ところが、何かぬるぬるしたもんにふれたも  
んじゃつで、うったまがって飛び起きてみると、何とカッパが脛ン毛ばひっかん抜い  
で、毛の先ついとる肉ばしゃぶつとるじゃなかな。慌てて逃げていくカッパの姿ば石  
工どんなはつきり見らったげなたい。

昔からカッパは人間のじごんすから手ば突っ込んで、腹わたば引き出して食うち  
言われとったが、こんカッパはお人好し、いやカッパ好きで気のこまんかったじゃろ。  
人間ば殺すような悪かこたせず、足の毛ば抜くぐらいが関の山じゃったげな。石工  
どんな、ハハア俺が堰ば造つとに川ば浚ゆるもんじゃつで、カッパ奴が俺に悪さばし  
よつとばいと気づいたので、熱が下がってからカッパが好物の胡瓜ば工事場に供え  
てことわけば言うたげな。それからこつち、石工どんの家にはやピタッと来んごてなり、  
堰の工事もさし障りなく順調に進み、立派な堰が出来上がり、その後は災害も  
少のうなつて村には平和が続いたそうじゃ。

今でんその石工どんが築いた堰は残っており、村の田畑ば守ってくれとったい。

(注) じごんす……尻の穴